

いろは都々逸研究

菊池 真一

いろはは四十八文字を頭に据えた都々逸集を翻刻紹介する。都々逸をいろは部類に編纂したものは対象外とする。

配列は、幕末年代不明分、幕末年代明記分、明治初期年代不明分、明治年代明記分、の順である。

国会図書館・関西大学図書館蔵本については、著作権消滅のものは翻刻許可を願うことなく、自由に翻刻してよいことである。

次の図書館の蔵書については、個別に翻刻許可を得た。該書の部分で注記してある。上田市立上田図書館・大阪市立中央図書館・大阪大学附属図書館・國學院高等学校・名古屋市蓬左文庫・西尾市岩瀬文庫。

一 『(ど)ハ(つ)』葉唄節用集』

(幕末刊。金龍山人編。菊池所蔵)

金龍山人こと歌沢能六斎(萩原乙彦)は、文政九年(1826)生れ、明治十九年(1886)没で、著作権は消滅している。

艶道伊呂波度独逸」(二十ウ)

いろになるみのゆかたもぬいではだじまんの夏の富じ

ろんよりせうをとられてないていひわけするとはばからしい

はかない糸にしとてんからしれてむすぶもふとしたできこゝろ

ほにしも東もしらないものをつれてうわきな旅かせぎ」(二十一オ)

へ ほれた女房のあるその人になんでこんなほれたろう

へ へびに女房がなられちゃこわいいろはしないとあきらめた

と とうから心にほれてはあれどどふもいひよるしほがない

ち ちわがつのつて根もないくぜつはらをたつたりたゝせたり

り (二十一ウ)

り 利口だと思つてかゝるはおまへがばかよそばの二はいもくつたやつ

ぬ めれてあふ夜はねてから崎のまつにかひなき明がらす

る るすをねらつてどろばつ猫が来てはちよこちよこぬすみぐい

を おまへじや気をもみ女房にやきがね是じやいのちもつゞくまひ」(二十二オ)

わ わたしも女子じやいひたいこともぬしのためだどがまんする

か かわゆがりじついつくしたわたしのかほを今さらふみつけられては

腹がたつ

よ よそふと思へど又かほ見ればどふもみれんで立かへる

た たまにあふゆへはなしがのこるしみじみだきねがして見たい」(二

十二ウ)

礼義であつきお屋しきさんはけつくわけなくとりみだし
 それほどあのこがかわいゝならばわたしにみれんはあるまひに
 つれてにげるとおまへはいふが女房をすてゝはいかれない
 ねる間もないほどおふいそがしや金の勘定でかたがはる」(二十三
 才)
 なんぼほれても見すかされてもばかにされてははらがたつ
 羅漢さまでもきものはまとふはだかじや道中もできまいよ
 むりなくぜつになかせておいて寝るとはあんまりむしがいゝ
 うたゝねのさめてためいき心のもつれ人にやはなせぬ此しだら」(二
 十三ウ)
 いけんするほどなほやけになりかんしやくおこしてやつあたり
 のろけてみんなになぶられながら思はずしらす口へでる
 おにのやうでも心のうちへんてんさまでもかなやせぬ
 くらうするのはてんからかくゝいきなていしゆをもつからは」(二
 十四才)
 やみとおまへにかういれあげてすへはどぶせうとうしさき
 まわしべうぶのたをれたゑんでとなりどうしのおちかづき
 拳もぐんしをしようといふはかねてむほんの下ゝる
 ふとしたことからついのがきて今じやかた時わすられぬ

「(二十四ウ)

こんななげきも思へばほんにむすぶの神がうらめしい
 えんがありやこそ高峯のさくら折て手いけの花にする
 てまへがつてのわがまゝいふもなごどひらずの夫婦中
 あどけないのがかわゆいけれど初心すぎるもじれつたい」(二十五
 才)
 三味せんまくらの身のふしだらはわがみながらもはづかしい
 きがねくろうもみなおまへゆへそれに今さら切ことば
 ゆふしごけんとたゞひと筆につなぎとめたる初会文
 めつきでしらせてさとれといへどさとつてゐながらしらぬかほ」(二
 十五ウ)
 みれんらしいがたゞひとことをいつてやりたいことがある
 ししみとあへぬつらさのつくかんしやくよかうもじれつたくなる
 ものか
 えん切櫃でさこうとしてもほれたどしにやきゝはせぬ
 ひ人にやいろかといはれてゐれど義理をかゝぬがたの美しい」(二十
 六才)
 もとをたゞせば他人と他人あらひだてすりやぬしのうち
 せなかそむけていゝたいこともがまんしてゐる其つらさ
 炭をつぎつき火ばしを筆にあつい男のかしらもじ
 京

けふとけふねがいも協ひはれて是からともしらが
京はきよう也けふはかなちがひヲツトそこらはせうちせうち

一「新作しりとり都々逸 一一編」

(幕末刊。菊池所蔵)

本書は作者不明であり、時代からして著作権は消滅していると考
えるのが常識的判断である。

新作しりとり都々逸 二編(表紙)

しりとりと逸 二編(見返し)

尻もせぬ

取しまりとて

都ぎまぎと

どうかまとめて

一さつにせん

作者の名代 さく丸(一オ)

いやなかげにもなびくがつとめやなぎのころもそふである

ろんはむやくといゝわけかずあいそづかしのすてことば

はなしもとぎれてたゞぼうぜんとふさくころのせつなさ(ママ)

(一ウ)

にかいせかれてかうしへきてはくもまがくれのつきのかほ

ほれたよくめかそのかんしやくのはらたつおまへがすいて見へ

へいきなふうでもころのくらうはてをうはべがこひのさと(二

オ)

としもゆかないかむろでさへもぬしをさつしてなみだがち

ちぎることばにまことがあらばわたしもたてぬくいぢとぎり

りんぎぶかいはほれたのせうこうはきなころじやりんきせぬ(二

ウ)

ぬしのことではおへやのぬけんぬかにくびだけ身がつまる

るいはともとともだちまでもぐるでつぶすかわしが身を

をゝいお客へみなうそいふてぬしへまことのふたせ川(三オ)

わらふてかなしいざしきもあればないてうれしいよぎの中

かつらぎのかみもみだれたくぜつに?かぶつならしづかにおぶちな

よ

よひのさはぎのざしきもひけてふけてさびしきとぶぎぬた(三ウ)

たぬきねいりもやぼとはしれどちよいとあやなすねやのしやれ
れんじがしらめばおへやへきがねやうじがくれのよぎのすそ
そふしたうはきがあるとはしらすたてゝまことがはらがたつ(四

オ)

つゆのころび寝あのかさまくらはなしもせぬうちあけのかね

ねんのあるのはせうちのおまへつれてにげるとかくごしな

ならのはたごや身はたびあるきのやまこへてもひとつはら(四ウ)

らくな身ぶんをたのしむならばよてからおまへにほれはせぬ

むりをいふほどかわいゝおまへいのちとられりやうかぶだらう

うたがいぶかいてもつともながらつとめのまことはさてつらぬ(五

オ)

あつゞけがつもりつもりしこの大ゆきにうちじやにようぼが二本づ

のんだむりざけまたかんしやくのどくとなるのはあほいかを

おへやへきがねもせかれりやいらぬしれりやまゝよと茶やのおく

(五ウ)

くがいくらうも十ねんあまりすいもあまいもしつたぞや

やつれすがたを見るまじないのくもるかゞみにかほの隈(六オ)

まち人のくるかこぬかとつじうらよんで見ればくるとのかみのつけ

けんくわしてせなかあはせる半時ばかりなかなをすもれいの?

ぶ(六ウ)

ふる雪のつもりつもりしふたりがおもひこよひとげたるおしのとこ

こがれしんだらこのくるしみはしらぬほとけじやはすのうえ

江戸もいなかかはらぬいろがひいてなびくは恋のそで(七オ)

てくだてれんはむかしのたとへじつでよんでもこぬはまあ

あの人ばかりはあきらめられぬまぶでわするゝうさつらさ(七ウ)

さかりの桜もちるのはちきよすへにやきれるがはなのさきざき

きぬぎぬのわかればかなきしのゝめがらすおちるなみだにそでのつ

ゆ

ゆうべのゆめ見がさてきにかゝりこよひ見なをすなたのゆめ(八

オ)

めぐるえにしがくらがへしてもまたもあふせのぬしがつみ

みがくいきじにたてぬくまことうちはにかゝるはさとのはじ(八

ウ)

しらぬかほしてつらあてらしくうたにそゝりはぬしのこゑ

ゑんはいなもの初かひにいやなぬしにほれるもおつなしゆび(九

オ) ひらきかゝりしあのふゆの梅つぼみのうちこそいろも香も
もん日もの日のしまひのふだもぬしはたのまぬわしが?せ(九ウ)

三 『新版いろはうた四十八文字上文句あ んだそれよしこのぶし』

(幕末刊。菊池所蔵)

本書は作者不明であり、時代からして著作権は消滅していると考
えるのが常識的判断である。

新版いろはうた

四十八文字

上文句

あんだそれよしこのぶし

八町堀七軒丁

しんみち

角伝板(一オ)

いのちかけてもそはねばならぬひとにいわれた事がある

ろんはないぞへおまゑのうわさしてはわたしはなぶられる

はらのたつまゝすねては見れどあとであやまるほれたなか

にくひながらもちやうづをゆふもみんなおまへの身のためよ(一

ウ)

ほれてほれられてあいぼれとやらしぬとわかれがなけりやよひ

へたなしうちといわんすけれどそこがよしんのあとやさき

とめてわるいとしたりつゝけふもとめてきかねばほれたぢやう

ちゑのない子にわる知へつけてわしをじらして嬉しがる(二オ)

りんきするよにいわんすけれどいわねばわしが身のつまり

ぬしをしのばせのきばにたゝせうちのしまつできがもめる

るすをつけこみしのでくるはうまひやうでも身にならぬ

をやをふりすてこきやうをはなれぬしをしとふてきたものを(二

ウ)

新版いろは哥

四十八文字

あんだそれよしこのぶし

角伝板(三オ)

わしがわるくばあやまるほどにすねずとこちらをむかしやんせ

かわらしやんすなおまへのこゝろうわきされてはわしやたらぬ

よこくずまひもおまゑがたよりそれにじやけんな事ばかり

たてひきづくならなまづめもはなすほれりや五本のゆびもきる

(三ウ)

れいのかんしやくおまへの氣しつしりつゝいうのがわしがむり

そつとしのばせ二かひへあげて玉にあふ夜のみじかさよ

つよひ事をばゆうては見れどぢきにあやまるほれたなか

ねんのあくのをゆびおりかぞへはやくいきたやぬしのそば(四

オ)

なまじなま中あわぬがましよあへばみれんもおもひだす

らんきものじやといわんすけれどわたしやぬしゆへきもちがう

むすびあふたるふたりが中をさくはきじんじやおやぢやない

うそじやうそじやといわんすけれどどうそもつのればぢつになる

(四ウ)

新版いろはうた

あんだそれよしこの

中上

八町堀七軒丁

角伝板(五オ)

ぬやなつとめもおまへがたよりたまにやなさけもかけさんせ

のりむをとめたがわしがむりかのめばおまへはしだらなし

おもふおまゑをひとりでねかしいやな御客をわしやつとめ

くぜつするまにつるよがあけたわたしゑかゑしちやきがすまぬ

(五ウ)

やめてくんなよつきやひ酒をつのりやわたしが身のつまり

まゝにならぬをしやうちでほれてまゝにしやうとはぬしのむり

けさもけさとてない所へよばれともよぶにはいのちがけ

ふでを手にもちまきがみだしてぬしの名をかきわらはれる(六

オ)

こゝろさだめてわたしはよべどぬしがうわきで氣がもめる

えてにほをあげおまへのうわきわしをおもわばやめなんせ

てれんでくだとめたむかし今は女房よこちのひと

あいそづかしはわたしはきらるならばすべよくわかれたや(六

ウ)

四十八文字中下
くぜつとぎれてもふひけすぎよかみもみだれて
手まくらでやつれはてたよすやすやとねひりし女のかほつくづくとうちながめ引かわひやくろうをさせたやら
角伝(七才)

さつしてくだんせわたしがこゝろぬしをたよりにこのつとめ
きしやうせぬしはほぐにもなるが四本半にはたれがした
ゆふべわかれてかゑして見たがこよひあわねば気がすまぬ
めもとはなもとこの子の顔を見れば見るほどおもひだす(七ウ)

四『いろは都々逸』

(幕末刊。西尾市岩瀬文庫蔵。81函26号)
本書は作者不明であり、時代からして著作権は消滅していると考
えるのが常識的判断である。

本書の翻刻については、西尾市岩瀬文庫の許可を得た。(平成二
三年一月二一日付)

表紙題簽欠。「いろは都々逸」は仮題。同じ内容で「手島先生い
ろは歌」の手書き題簽付きの本(『いろは歌』81函55号)が同文
庫にある。心学教訓都々逸。

いぢがわるうは生れはつかぬ直が元来(もとより)うまれつき
ろくなこゝろを思案でまげるまげねばまがらぬわがこゝろ(一
才)

はぢをしれかしはぢをばしらねば恥のかきあきするものじや
にくむはづない不忠と不忠ほかはにくまふやうがない(一ウ)

ほしやをしやの思案は鬼よろくなこゝろをくるしめる
へちた事には善事はないぞしれた通がみなよいぞ(二才)

とにもかくにも親孝行と主へ忠義をわすれやんな
ちかい親子にむごいを見ればあかの他人はおそろしや(二ウ)

利口ぶるのは大かたあほうしれた通りでよい事を
ぬかるまいぞや思案の鬼がといた地獄へつれてゆく(三才)

留守といはれぬおのれがこゝろよいもわるいもおぼえあり
男女の行義が大事あくしやうものめは人のくず(三ウ)

わねをたてねば悪事は出来ぬしれよ心に我はない
かねをほしがるそこいがいやよ人を見くだす天狗ずき(四才)

よだれ八尺ながすは色よまよへばとろさもおぼえなし
ためによい事いふものはいやで毒をあてがふ人がすき(四ウ)

礼義だてこそをかしうござるたてのなれのがれいである
損をかけたり無理をばするは得じやござらぬ毒じやまで(五
才)

つねに主をば大事におもへばしごとするのも手がかるい
ねてもさめても立ても居ても無理をいふまいむりせまい(五
ウ)

ないとおもふはそれははや思案あるのなひのみなまよひ
らくがしたくば心を知りやれらくがこゝろのうまれつき(六
才)

むごい事をばいふたりしたりすれば我身にみなむくふ
うそは心におぼえがあるぞ人はともあれ我かしら(六ウ)

ぬでの玉川円うも見えぬ何所がながれじやはてがない
のめやうたへや一寸さきは遠いさわぐおのれが円でやみ(七
才)

おくの奥までさがしてみてもかぎりしられぬ我こゝろ
久米の仙人をかしいことようそのかは見てたまされた(七ウ)

灸をすやれ孝行ものじや親もよろこぶ身も無事な
まける事をばきらやるげながなぜに欲にはようかたん(八才)

けはひ化粧で外からぬれどむさいこゝろはぬられまい
ふるい物ほど重宝ならばはじめしられぬ我こゝろ(八ウ)

こくうむてんにおひろいすまゐ柱なればやねもなし
縁にひかれて心はうつるわるい事にはまじるまい(九才)

天のめぐみでないものはないに恩にきせねば恩にきぬ
あたらしこゝろに思案のそへ木それがつかへてうごかれぬ(九
才)

さても心は奇妙なものじやおぼえしならねど覚えしる
きたらきたまゝ去ればさつたまゝとかく思案はみなくずじや(十
才)

夢の世じやとは口にはいへど寝言いふのがものほしや
目にもみえねば音にもきかずされどなしともおもはれず(十
ウ)

みたいしりたいたいそのこゝろさしあればしらるゝわがこゝろ
知らばしらるゝ心をしらす人こそはかなけれ(十一才)

得たる心をうしなひなりで死んでしまふはあんまりじや

ひ 貧と福とは天命なればわれがまゝにはどもならぬ」(十一ウ)
も しがき貧乏する人多しならぬもふけをしたがつて
世 智でかねをば持ても慈悲で人を救はねばかねのばん」(十二
オ)
す まば住よし赤子の心これぞめでたききしの松
京 京の太平楽々の身で外の願はみな榮耀」(十二ウ)

五『伊呂波四十八文字しり取文句都々いづぶし』

(幕末刊。関西大学図書館蔵。H911.91/511)
本書は作者不明であり、時代からして著作権は消滅していると考え
えるのが常識的判断である。

文句は蓬左文庫本(尾19-178)と同じだが、スタイルは異なる。
伊呂波四十八文字しり取都々いづぶし 上

八丁堀 松坂屋板」(一オ)
いつかふたりがめうとにならば手なべさげてもうれしかる
ろうかづたいのしのびのこひじもはやしれたらまゝのかは
はだかにんぎやうとなるわしがみもみんなおまへがかはいさに
にくやからすでモウきぬぎぬとじつとひきよせかほとかほ」(一ウ)
ほんにおまへもやきもちぶかいおぼへもないこといゝならべ
へんなうはさをわしやくたびにおもひすぐしてぬしのこと
とをさがるのはすへさくはなよしんぼさんせやちのうち
ちはがこうじてせなかとせなかあけのからすがなかなあり」(二オ)
りんきせいとたしなみながらなせかこゝろがやすまらぬ
ぬしのこいかとまただまされせて出てはみんなにわらわれる
るすをめぐりてくるまをとこもねこのしやうやらぬすみぐひを
おもひおもはれかうなるからはぎりもせけんもまゝのかは」(二ウ)
伊呂波しり取どゝ一づし 下
八丁堀 松坂屋板」(二オ)
わたしやこれほど思ふてあるにかうもじやけんになるものか
かみやほとけにねがひがとゞきけふのごげんのうれしさよ
よいにしのばせやうやうのことであふてかへしてほつとした
たとへのゝすへ山のおくまでも手に手を取あふてふたりづれ」(三

ウ)
れいのやぼめがまたしげしげにうるさいことだようしやうそ
そふたゆめ見てついでおこされてあとをみたさにはらがたつ
つきにむらくもはなにはかぜよぬしにあふよのあけのかね
ねてもさめてもおまへのことをおもはぬ日とてはないわいな」(四
オ)
ないてわかれてついでそれなりにひとりぬるよのあだまくら
らくなせかいにくがいのつとめしはしわすりよと酒ものむ
むねにしあんはさだめてあれどちこうじてものおも
うはきなおまへにしみみほれてわたしやあはびのかたおもる」(四
ウ)
<以下欠>

六『伊呂波しり取どゝ一づし』

(幕末刊。菊池所蔵)
本書は作者不明であり、時代からして著作権は消滅していると考え
えるのが常識的判断である。

伊呂波しり取どゝ一づし 下
八丁堀 松坂屋板」(二オ)

わたしやこれほど思ふてあるにかうもじやけんになるものか
かみやほとけにねがひがとゞきけふのごげんのうれしさよ
よいにしのばせやうやうのことであふてかへしてほつとした
たとへのゝすへ山のおくまでも手に手を取あふてふたりづれ」(三
ウ)
れいのやぼめがまたしげしげにうるさいことだようしやうそ
そふたゆめ見てついでおこされてあとをみたさにはらがたつ
つきにむらくもはなにはかぜよぬしにあふよのあけのかね
ねてもさめてもおまへのことをおもはぬ日とてはないわいな」(四
オ)
ないてわかれてついでそれなりにひとりぬるよのあだまくら
らくなせかいにくがいのつとめしはしわすりよと酒ものむ
むねにしあんはさだめてあれどちこうじてものおも
うはきなおまへにしみみほれてわたしやあはびのかたおもる」(四
ウ)

<欠アリ>
 やがてふうふといふてはぬれどむねのけむりがあさまやま
 まゝにならぬがうきよといへどあまりしんきとちやわんざけ
 けさもけさとておまへのうわさあんじすごしてものおもふ
 ふかくなるほどおもひがますよはやくゆきたやぬしのとこ(五
 才?)
 こひしこひしとおもふてゐた?ゆめじやないかやぬしのこえ
 ゑんのつなやかやたよりがありてぬしのところへふみのつて
 ていしゆきどりのぬしよりほかにうはきどころかなんのまあ
 あいのおさいとのむさけよりもふたりねざけのおもしろさ(五
 ウ?)
 いろはしり取どゝ一ぶし 下(三才)
 さいたさくらもみだれりやちるよしんぼうさんせやちらぬさき
 きづよいおかたとらみつないつおつるなみだのそでのつゆ
 ゆうべあふたにまたかほ見たくふみにおもひをふうじこめ
 めがほしのんでうきなをたてゝまよふふたりがこひのやみ(三ウ)
 みゑもかざりもなくほれぬいてぬしのことばかりいひくらし
 しのびあふよはみじかふてならぬにくやよあけのかねのこゑ
 ゑきもないことさきぐりをしてぬしをあんじてものおもひ
 ひとめしのぶははじめのうちよいまじやひとめもよのぎりも(四
 才)
 <四ウは判読不能>

七『伊呂波四十八文字しり取文句都々い つぶし』

(幕末刊。菊池所蔵)
 本書は作者不明であり、時代からして著作権は消滅していると考え
 えるのが常識的判断である。
 伊呂波四十八文字しり取文句都々いつぶし 上
 八丁堀岡崎丁 あづま清吉板(一才)
 いつかふたりがめうとにならば手なべさげてもうれしかる
 ろうかづたいのしのびのこひじもはやしれたらまゝのかは
 はだかにんぎやうとなるわしが身もみんなおまへがかわいさに

にくやからすでモウきぬぎぬとじつとひきよせかほとかほ(一ウ)
 ほんにおまへもやきもちぶかいおほへもないこといゝならべ
 へんなうはさをわしやくくたびにおもひすぐしてぬしのこと
 とほざかるのはすへさくはなよしんぼさんせやちののうち
 ちわがこうじてせなかとせなかなあけのからすがなかなおり(二才)
 りんきせまいとたしなみながらなせかこゝろがやすまらぬ
 ぬしのこいかとまただまされて出てはみんなにわらわれる
 るすをめぐけてくるまをとこもねこのしやうやらぬすみぐひを
 おもひおもはれかうなるからはぎりもせけんもまゝのかわ(二ウ)
 伊呂波しり取どゝ一ぶし 下
 東清はん(三才)
 わたしやこれほど思ふてゐるにかうもじやけんにするものか
 かみやほとけにねがひがとゞきけふのごげんのうれしさよ
 よいにしのばせやうやうのことであふてかへしてほつとした
 たとへ野のすへ山のおくまでも手にて取あふてふたりづれ(三
 ウ)
 れいのやぼめがまたしげしげにうるさいことだようしやうぞ
 そふたゆめ見てつひおこされてあとをみたさにはらがたつ
 つきにむらくもはなにはかぜよぬしにあふよのあけのかね
 ねてもさめてもおまへのことをおもはぬ日とてはないわいな(四
 才)
 ないてわかれてつひそれなりにひとりぬるよのあだまくら
 らくなせかいにくがいのつとめしはしわすりよと酒ものむ
 むねにしあんはさだめてあれどちがこうじてものおもう
 うはきなおまへにしみじみほれてわたしやあはびのかたおもる(四
 ウ)

八『いろはしりとりよし此』

(幕末刊。名古屋市蓬左文庫蔵)
 本書は作者不明であり、時代からして著作権は消滅していると考え
 えるのが常識的判断である。
 本書の翻刻については、名古屋市蓬左文庫の許可を得た。(22
 指令教蓬第19号の2)
 いろはしりとりよし此(一才)

いつかふたりがめうとにならば手なべさげてもうれしかる
 ろうかつたいのしのびのこひじもはやしれたらまゝのかは(一ウ)
 はだかにんぎやうとなるわしが身もみんなおまへがかわいさに
 にくやからすでモウきぬぎぬとじつとひきよせかほとかほ
 ほんにおまへもやきもちぶかいおほへもない(二ウ)といひならべ(二
 才)
 へんなうはさをわしやくくたびにおもひすぐしてぬしのこと
 とほざかるのはすへさくはなよしんぼさんせやちとのうち
 ちわがこうじてせなかとせなかあけのからすがなかなおり(二ウ)
 りんきせまいとたしなみながらなせか心がやすまらぬ
 ぬしのご系かとまただまされて出てはみんなにわらはれる(三才)
 るすをめぐけて来るまをとこもすこしはきがねをするものを
 をもひおもはれかうなるからはぎりもせけんもまゝのかわ
 わたしやこれほどおもふてゐるにこうもじやけんにするものか
 かみやほとけにねがひがとゞきけふのごげんのうれしさよ(三ウ
 ・四才)
 よひにしのばせやうやうのことであふてかへしてほつとした
 たとへ野のすへ山おくまでも手にてもひかれてふたりづれ(四ウ)
 いろはしりとどゞいつよしこの 中の巻(五才)
 れいの野暮めがまたしげしげにうるさいことだようしやうぞ
 そふたゆめ見てついおこされてあとをみたさにはらがたつ(五ウ)
 つきにむらくもはなにはあらしぬしにあふよのあけのかね
 ねてもさめてもおまへのことをおもはぬひとてはなわいな
 ないてわかれてつひそれなりに一人ぬるよのあだまくら(六才)
 らくなせかいにくがいのつとめしむすりよとさけをのむ
 むねにしあんはさだめてあれどぐぢがこうじてものおもう
 うはきなおまへにしみじみほれてわたしやはあはびのかたおもゝ六
 才)
 ゐかにつとめのわたしぢやとてもこうもつたがふものかいの
 のやまこへてもおまへとふたりくらそと思ふてゐるものお(七才)
 おもひつめたがふたりのいんぐわまゝにならねばつれてゆく
 くるかくるかたまつ身のつらさあへばわかれのまたつらや(七ウ)
 やがてふうふといふてはゐれどむねのけぶりがあさまやま
 まゝにならぬがうき世といへどあまりしんきとちやわんぢけ(八
 才)
 けさもけさとておまへのうはさあんじすごしてものおもふ

ふかくなるほどおもひがますよはやくゆきたやぬしのこと(八ウ)
 いろは尻とりどゞ一よしこの 下の巻(九才)
 こひしこひしとおもふてゐたにゆめじやないかやぬしのこと
 えんのつなやかやたよりがありてぬしのところへふみのつて(九ウ)
 ていしゆきどりのぬしよりほかにうはきどころかなんのまあ
 あいのおさへとのむさけよりもふたりねぎけのおもしろさ
 さいたさくらも乱れりやちるよしんぼさんせやちらぬさき(十才)
 きづよいおかたとうらみのなきつおつるなみだのそでのつゆ
 ゆふべあふたにまたかほ見たくふみにおもひをふうじこめ(十ウ)
 めかほしのんでうきなをたてゝまよふ二人がこひのやみ
 みえもかざりもなくほれぬいてぬしのことばかりをいひくらし
 忍びあふよはみじこふてならぬにくや夜明のかねのご系(十一才)
 系きもないことさきぐりをしてぬしをあんじてものおもひ
 ひとめしのぶははじめのうちよ今じやひとめもよのぎりも(十一
 ウ)
 もとはたがひのこゝろやすだてよすねずとこちらをむかしやんせ
 せなかあはせてけんくわもすれどこちらむいたら明がらす(十二
 才)
 すゑのやくそくながながしいもまつにかひあるきのふけふ
 けふはめでたくいもせもまなびかはらしやんすなかはるまい(十
 二ウ)

九 『いろはしりとどゞいつ』

(幕末刊。上田市立上田図書館花月文庫蔵。音楽ノ362ノ花月文庫)
 本書は作者不明であり、時代からして著作権は消滅していると考え
 えるのが常識的判断である。

本書の翻刻については、上田市立上田図書館の許可を得た。(2
 上図第70号)
 いろはしりとどゞいつ

初へん
 馬喰町三丁目
 吉田屋小吉板(一才)
 いつかふたりがめうとにならば手なべさげてもうれしかる
 ろうかつたいのしのびのこひじもはやしれたらまゝのかは(一ウ)

はだかにんぎやうとなるわしが身もみんなおまへがかわいさ
 にくやからすでモウきぬぎぬとじつとひきよせかほとかほ
 ほんにおまへもやきもちぶかいおほへもない」といひならべ」(二
 才)

へんなうはさをわしやくくたびにおもひすくしてぬしのこと
 とほざかるのはすへさくはなよしんぼさんせやちとのうち
 ちわがこうじてせなかとせなかあけのからすがなかなおり」(二ウ)
 りんきせまいとたしなみながらなせか心がやすまらぬ
 ぬしのご系かとまただまされて出てはみんなにわらはれる」(三才)
 るすをめぐけて来るまをとこもすこしはきがねをするものを
 をもひおもはれかうなるからはぎりもせけんもまゝのかわ
 わたしやこれほどおもふてゐるにこうもじやけんにするものか
 かみやほとけにねがひがとゞきけふのごげんのうれしさよ」(三ウ
 ・四才)

よひにしのばせやうやうのことであふてかへしてほつとした
 たとへ野のすへ山おくまでも手にてもひかれてふたりづれ」(四ウ)
 都々一 二編

杉丘画
 馬喰町三丁目
 吉田屋小吉版」(五才)

れいの野暮めがまたしげしげにうるさいことだよどうしやうぞ
 そふたゆめ見てつひおこされてあとをみたさにはらがたつ」(五ウ)
 つきにむらくもはなにはあらしぬしにあふよのあけのかね
 ねてもさめてもおまへのことをおもはぬひとてはないわいな
 ないてわかれてつひそれなりに一人ぬるよのあだまくら」(六才)
 らくなせかいにくがいのつとめしはしわすりよとさけをのむ
 むねにしあんはさだめてあれどぐぢがこうじてものおもう
 うはきなおまへにしみじみほれてわたしやははびのかたおもゐ」(六
 ウ)

ゐかにつとめのわたしぢやとてもこうもつたがふものかいの
 のやまこへてもおまへとふたりくらそと思ふてゐるものお」(七才)
 おもひつめたがふたりのいんぐわまゝにならねばつれてゆく
 くるかくるかまつ身のつらさあへばわかれのまたつらや」(七ウ)
 やがてふうふといふてはいれどむねのけづりがあさまやま
 まゝにならぬがうき世といへどあまりしんきとちやわんぢけ」(八
 才)

けさもけさとておまへのうはさあんじすごしてものおもふ
 ふかくなるほどおもひがますよはやくゆきたやぬしのとこ」(八ウ)
 いろはしりとり都々一

三へん

杉丘画

馬喰町三丁目

吉田屋小吉版」(九才)

こひしこひしとおもふてゐたにゆめじやないかやぬしのごえ
 えんのつなかやたよりがありてぬしのところへふみのつて」(九ウ)
 ていしゆきどりのぬしよりほかにうはきどころかなんのまあ
 あいのおさへのむさけよりもふたりねざけのおもしろさ
 さいたさくらも乱れりやちるよしんぼさんせやちらぬさき」(十才)
 きづよいおかたとうらみつなきつおつるなみだのそでのつゆ
 ゆふべあふたにまたかほ見たくふみにおもひをふうじこめ」(十ウ)
 めかほしのんでうきなをたててまよふ二人がこひのやみ
 みへもかざりもなくほれぬいてぬしのうはさをいひくらし
 忍びあふよはみじかふてならぬにくや夜明のかねのご系」(十一才)
 彘きもないことさきぐりをしてぬしをあんじてものおもひ
 ひとめしのぶははじめのうちよいまじやひとめもよのぎりも」(十
 一ウ)

もとはたがひのこゝろやすだてよすねずとこちらをむかしやんせ
 せなかあはせてけんくわもすれどこちらむひたら明がらす」(十二
 才)

すゑのやくそくながながしいもまつにかひあるきのふけふ
 けふはめでたくいもせもまなびかはらしやんすなかはるまい」(十
 二ウ)

十『いろはしりとりどん』

(幕末刊。大阪大学図書館小野文庫蔵。9185/ON0/46)

本書は作者不明であり、時代からして著作権は消滅していると考
 えるのが常識的判断である。

本書の翻刻については、大阪大学附属図書館の許可を得た。

(No.1041)

文句は関西大学本 (H911.91/15/1) 蓬左文庫本 (尾 19-178) 大阪

大学小野文庫本(918.5.ONO45)と同じ。菊池所蔵は初編・三編の

み。
いろはしりとどいっ

初へん

馬喰町三丁目

吉田屋小吉版(初一オ)

いつかふたりがめうとにならば手なべさけてもうれしかる
ろうかつたいのしのびのこひぢもはやしれたらまゝのかは(初一

ウ)

はだかにんぎやうとなるわしが身もみんなおまへがかわいさに

にくやからすでモウきぬぎぬとじつとひきよせかほとかほ

ほんにおまへもやきもちぶかいおほへもないこといひならべ(初

二オ)

へんなうはさをわしやくたびにおもひすくしてぬしのこと

とほざかるのはすへさくはなよしんぼさんせやちのうち

ちわがこうじてせなかとせなかあけのからすがなかなおり(初二

ウ)

りんぎせまいとたしなみながらなせか心がやすまらぬ

ぬしのことかまただまされて出てはみんなにわらはれる(初三

オ)

るすをめぐけて来るまをとこもすこしはきがねをするものを

をもひおもはれかうなるからはぎりもせけんもまゝのかわ

わたしやこれほどおもふてゐるにこうもじやけんにするものか

かみやほとけにねがひがとゞきけふのごげんのうれしさよ(初三

ウ・初四オ)

よひにしのばせやうやうのことであふてかへしてほつとした

たとへ野のすへ山おくまでも手にてもひかれてふたりづれ(初四

ウ)

都々一 二編

馬喰町三丁目

吉田屋小吉版(二一ノ一オ)

れいの野暮めがまたしげしげにうるさいことだよどつしやうぞ
そふたゆめ見てつひおこされてあとをみたさにはらがたつ(二一ノ

一ウ)

つきにむらくもはなにはあらぬしにあふよのあけのかね
ねてもさめてもおまへのおもはぬひとてはないわいな

ないてわかれてつひそれなりに一人ぬるよのあだまくら(二一ノ二

オ)

らくなせかいにくがいのつとめしはしわすりよとさけをのむ

むねにしあんはさだめてあれどぐちがこうじてものおもう

うはきなおまへにしみじみほれてわたしやあはびのかたおもぬ(二

一ノ二ウ)

あかにつとめのわたしちやとてもこうもつたがふものかいの

のやまこへてもおまへとふたりくらそと思ふてゐるものお(二一

三オ)

おもひつめたがふたりのいんぐわまゝにならねばつれてゆく

くるかくるかともつ身のつらさあへばわかれのまたつらや(二一

三ウ)

やがてふうふといふてはいれどむねのけぶりがあさまやま

まゝにならぬがうき世といへどあまりしんきとちやわんざけ(二

一ノ四オ)

けさもけさとておまへのうはさあんじすこしてものおもふ

ふかくなるほどおもひがますよはやくゆきたやぬしのこと(二一

四ウ)

いろはしりとど都々一

三べん

馬喰町三丁目

吉田屋小吉版(三二ノ一オ)

こひしこひしとおもふてゐたにゆめじやないかやぬしのこと

えんのつなかやたよりがありてぬしのところへふみのつて(三二

一ウ)

ていしゆきどりのぬしよりほかにうはきどころかなんのまあ

あいのおさへとのむさけぶりもふたりねぎけのおもしろさ

さいたさくらも乱れりやちるよしんぼさんせやちらぬさき(三二

二オ)

きづよいおかたとうらみつなきつおつるなみだのそでのつゆ

ゆふべあふたにまたかほ見たくふみにおもひをふうじこめ(三二

二ウ)

めがほしのんでうきなをたてゝまよふ二人がこひのやみ

みへもかざりもなくほれぬいてぬしのことばかりをいひくらし
忍びあふよはみじかふてならぬにくや夜明のかねのこゑ(三三ノ三

系きもないことさきぐりをしてぬしをあんじてものおもひ
ひとめしのぶははじめのうちよ今じやひとめもよのぎりも」(三ノ
三ウ)
もとはたがひのこゝろやすだてよすねずとこちらをむかしやんせ
せなかあはせてけんくわもすれどこちらむひたら明がらす」(三ノ
四オ)
す系のやくそくながながしいもまつにかひあるきのふけふ
けふはめでたくいもせもまなびかはらしやんすなかはるまい」(三
ノ四ウ)

十一 『いろは四十八しり取ど』

(幕末刊。玉恒板。菊池所蔵)

本書は作者不明であり、時代からして著作権は消滅していると考え

えるのが常識的判断である。

いろは四十八しり取ど』上
玉つねはん」(一オ)
いつか二人りがみやうとにならばてなべさげてもうれしかる
ろん？ないぞいやじやといふがそめてゆくぞいこのしらは
はだかにんきやうとなるわしがみはみんなおまへがかわいさに
にくやからすがまうきのノ、でしかとだきしめかほとかほ」
ウ)
ほんにおまへはやくもちぶかひおぼいもないこといゝならへ
へんなうわきをわしやくたひにあんじくらすはぬしのこと
とうざかるのはすいさく花よしんほしやんせよちのうち
ちわがかうじてせなかとせなかあけのからすのなかなおり」(二
オ)
りんきせまいとたしなみながらなせかこゝろかさたまらぬ
ぬしのごゑかと又だまされてはみんなにわらはれる
るすを目がけてくるまごともしれりやどきやうのさめとこお
おもひおもまわれかうなるからはぎりもせけんもまゝのかわ
」(二ウ)
花見もとりのいろは四十八しりとり掛合しんばんと』いつ 下
兩國 玉恒板」(三オ)
わたしやこれほどおもふているにかうもじやけんになるものが

か
かみやほとけにねがひがとゞきけうのごゑんのうれしさよ
よいにしのはせよふよのことであふてかいしてほつとした
たとひ野ゝすいやまおくまでをとりあふて二人りつれ」(三
ウ)

十二 『いろはしりとり都々』

(幕末刊。大阪大学図書館小野文庫蔵。918.5/ONON/45)

本書は作者不明であり、時代からして著作権は消滅していると考え

えるのが常識的判断である。

本書の翻刻については、

大阪大学附属図書館の許可を得た。

(No.1041)

文句は関西大学本(H911.91/5/1)蓬左文庫本(尾 19-178)大阪
大学小野文庫本(918.5/ONON/46)と同じ。

いろはしりとり都々』一編
中ばし 松坂屋板」(一オ)
れいの野暮めがまたしげしげにうるさいことだようしやうぞ
そふたゆめ見をつみおこされてあとをみたさにはらがたつ」(一ウ)
つきにむらくもおまへはあらしぬしにあふよのあけのかね
ねてもさめてもおまへのことをおもはぬひとはないわいな
ないてわかれてつひそれなりにおもはぬひとはないわいな
らくなせかいかつひのつとめしはしわすりよとさけをのむ
むねにしあんはさだめてあれどぐちがこうじてものおもう」(二ウ)
うはきなおまへにしみみほれてわたしやあはびのかたおも
ぬかにつとめのわたしぢやとてもこうもつたがぶ物かいの
野やまこへてもおまへとふたりくらそとおもふてゐるものお」(三
オ)
おもひつめたがふたりのいんぐはまゝにならねばつれてのく
くるかくるかとまつ身のつらさあへばわかれのまたつらや」(三ウ)
やがてふうふといふてはぬれどむねのけづりがあさまやま
まゝにならぬがうき世といへどあまりしんきとちやわんざけ」(四
オ)
けさもけさとておまへのうはさあんじすごしてものおもふ
ふかくなるほどおもひがますよはやくゆきたやぬしのとこ」(四ウ)

十三 『新作こゝろいき文句四十八文字大一座しりとり都々一』

(幕末刊。両国屋百板。菊池所蔵)

本書は作者不明であり、時代からして著作権は消滅していると考
えるのが常識的判断である。

新作こゝろいき文句四十八文字大一座しりとり都々一 上

両国屋百板(一才)

いへばくぜつのはねとはなれどよそに花あるふたごゝろ
ろくにはいふまいせけんの人二度のつとめのこのしらは
はかないすがたとわしやなりふりもみんなたれゆへぬしゆへに
にくいしうちとらみつないつなみだかくしてまたしんぼ
ほぐにはなるまいあのことのははすへまでじやうくらべ(一
ウ)
へんなゆめ見てふとめをさましおもしすごしもぬしのこと
とふざかりやこふもじやけんとわしやなくばかりおんなごゝろでせ
まいぐち
ちかいたてたよおもわぬ人にかいたきせうもときのぎり
りかいらづめでこいじがなるかこうなりやいきじできればせぬ
ぬかにくぎうつおへやのいけんむだなことだよそいとげる(二才)
るらうさせたもみなわたしゆへたてつはなるまいぬしのかを
をつなはづみからついのりがきていまじやかへらぬあすかがわ
伊呂波四十八文字しり取心いき都々一 下
わけはこふだところのそこをゆふてきかせちやわるいのか
かみにねがいもほかではないがはれてあいたゞひとよ(二ウ)
よもすがらねやのひまさへつれなき人とおもいだしたるうたがるた
たまにきづとはおまへのことよすこしはしんぼうしておくれ
れんがはいかうたよむひとまよふちやとけまいこいのなぞ
そえるゑんならいくちよかけるともにじせつのすへをまつ
つまづく小さいしにあと見かへりてにくないながらもなでるむね(三
オ)
ねづみなきしてついだまされてぬしのてくだにかゝるわな
ながめ見あかぬつきよみやみとよわりやすいはあきのそら
らくなむかしにさてひきかへていまはかへなきみをくやむ

むすぶいづもでむすばぬゑんはあふたしよてからこのくるう
うきなたゝずのまもりがあらばかけてうわきがしてみたぬ(三ウ)
新作伊呂波四十八文字大一座しり取都々一 上之巻

こゝろいきもん句

両国屋百板(四才)

あやなかせにもなびくはやなぎして見りやくがいはいつらいもの
のきばつたへのつばめでさへもめうとぐらして見たいはこいのお
およばぬことじやとわしやしりながらそふて見たいはこいのお
くみわけて見ればしうとが何にくかるういとしいをまいをうみのお
ややくじやなければたらわぬわしをむまくだましたくちぐるま(四
ウ)
まゝにならねどこふなるからはあさいこゝろのおよぶたけ
けさのわかれがわしやきにかゝるつがいはなれぬこのびやうぶ
ふかくなるほど人めのせきをこへてゆきたやぬしのこと
こゝろうちとけやうやうねたらもはやあけがたとりのこえ
えんのあさせとわしや白波のおともきゝたいふみのつて(五才)
てなべさげてもそうきでいるにいまのくがいがなんのまあ
あはぬむかしにくらべてみればたよりをまつよのじれつたさ
いろは四十八文字しりとり心いきどゝ一ツ 下
さへたつきよにじやまするくもがあるかこよひのむなさわぎ
きれてみれんで又おもいだし人にいわれぬそでのつゆ(五ウ)
ゆきつもとどりつしあんにあまりねぐらさだめぬむらすゞめ
めいかこうさへかほみめぐりとむりなねがいのかみだのみ
みづにうつりしそのつきかげにとゞかぬこひじにみをやつし
しのびあふよはふさいだかほゝみせてうきなたゝぬちゑ
ゑんもゆかりもないしよへせじをゆうてつくるうけうのしゆび(六
オ)
ひんすりやどんすのやくとはいへどぬしにはしかけもかんざしも
もつれかゝりし此くろかみをとけてやうきにならしやんせ
せけんはれてのわたしが人といふをたよりに日をくらす
すへにむすばるゑんにあやかとけでうれしいきのふ京
京はめでたいさて四かいなみはれてふうふのわびずまい(六ウ)

十四『新作さわりよし』の咄し』

(幕末刊。四代目桂文治著。関西大学図書館蔵。911.65/551)
四代目桂文治は生没年不詳だが、江戸時代に亡くなったと考えられる。よって著作権は消滅している。

「い」から「う」まで。

新作さわりよしこの咄し(表紙)

(絵) (見返し)

驚のにくや初音を障子こし

四代目桂文治(口絵オ)

(絵) (口絵ウ)

酒は爛着は気どり酌は髪長とは宜なるかな。名座玉席に山海の珍味を金燭の光ますとも酌人は石部金吉も御辞宜仕そふな堅者が出て気どりもせねば其味有て無に似たり破れ無し路の上に。鮮かずの子のり爛も心あきうま合同土は気どりは(序オ)
せねども諸君子の読とりに出せし我等が戯作味無き安肴のこつこつ長達に弾かして諷ひ給へる事を希而已
新作いるはよしこの咄し 四代目桂文治(序ウ)
今をさかりと咲いたるさくら(はつたはる風)はる風もしばし花のあたりをよきてふけふけ(詞)きたない哥じやネエ力鼻のあたりをよきてふいたら水ばながおちる。ナア二其はなじやネエ。ダケド水ばなに違ネイナゼ。ハテこぼれてかゝる。鼻の露ではないかいナア(一オ)
炉のそばで人の手まへはまじめで居たが「口とりどりの其うわさきくほどゑんのうす茶かとふかひこい茶の中とはいへど」水さゝれたが杓のたね(一ウ)
はれてあはれぬ恋路のやみに(詞)エ、じれつてい一ツすむとてうちんたゝだやうに成たソリヤおまつりがすんだらてうちんたゝんだやうになるはづた。ヲヤヲヤおまつりがすんだにまたてうちんがひろがつた「エ、ソリヤ煩惱じやないかいナア(二オ)
荷もちすれども義は堅親父(浄るり沼づ)申旦那様むかふのたて場にどじやうの名物がムリ升。ソレハよいがこなたのあしもとを狂言師に見せたいのハイけさからまだ一文も銭のかほ見ませぬによつてあしもひよろつき」喰ズ沼津でムリ升(二ウ)

ほめられたさに子を先立テ(詞)申白太夫さん桜丸が死んだのでおまへをやしなふものがネエカ。イエイエ」のこる二人が三ツ子と申升(三オ)
下手な芸者をそだてる客は(つるべ)かほのみみじもくみてしるつなでにかよふ涙のしづく(詞)ソリヤつるべじやネエカ。ソウサ旦那はたとへていおふならつるべサ。ナニつるべドコジヤネイ井戸の神サ。ナゼ」ハテ酔人ではないかいナア(三ウ)
時ぎりの御飛脚トみちづれになりて「申おひやくさん大そふお早い御あしダネイ。ナニゆがんだ松の木でかかないませんおまへさんのあしはまつぐダガゆがんだ松の木とはハテ時ぎりだからゆがんだ松の木サナゼ」エ、はしらにやならぬとしやれて行(四オ)
ちいさい時からおまへをまはし(かつら川しん内)あはれをあとにとふざかるまちはなれてやうやうとせなをふるしてとりどりに(詞)エ、コせなをふるしてト言カアリアおふてゐるからおびや長右衛門ソソナラしんじうしないうちには「ソリヤ死んのやじやないかいナ(四ウ)
りんきするきはさらさらないが(しん内)こゝろの芋がせむすぼれてほどもやらずうつとりともたれかゝりしとこばしらすやすやねむる気くたびれ(詞)コレ尾上さん酒でものんでうきさんせおまへさんがふさいでゐるとかわひそふにかむるまでかアノやうにもの思ひイエアノ子はわたしの身の上しるこだから「あんしるのじやないかいナア(五オ)
盗みするの皆主の為(浄るり)あはれみあつて国次の刀のせんぎすむ返は夫の命をたすけてたべ(詞)アリア刀のせんぎしていにや小判の十両ももらうダ。ナゼ阿波の十両兵衛と云じやネエカ。ナニせいでいもらつた所が四十三分サナゼ八テほんとうわ」銀十両じやないかいナア(五ウ)
瑠璃色につけたなすびの見かけはヨイガ「アイツワじつらしう見へても妻にしてみな根がアクダカラ」色もさめるじやないかいナア(六オ)
思ひ寝の夢おどろかすまだ初夜のかね(詞)エ、コ大晦日はせはしい物だそれに久松メカ帳箱にもたれて夢を見るとは大そふひまな質やダネエナリアリヤ質おきにくるのをまつて居るのだから名が「質屋待ではないかいナア(六ウ)
わけもきかずにうちてうちやくは(しん内)エ、こゝろづよやどうよくなにくやトひぎに引よせてさすりつないつかほを上げ(詞)

ソレみなはれうちかけのきんしがほつけて親方がなき升ワイナ。イヤレハ七百メ目のしやくきんおふて居るがソチノ親かたがなくかきんしがなくかしらんが」コチノ銀主もないて居る」(七才)

唐と日本でくらうをなさる」(詞)老一管は韃靼国をほろぼして大そふおもい身に成つた。一貫がおもい身になつたら。トウシテイ」ソリヤ武朱と銭ト二すればよい」(七才)

夜討する気で黒装束は」(詞)由良之介もあてがちがつて居ぜ。ナゼやみのばんかたきを討つもりでくろしやうぞくをこしらへたがアイニク雪が降やガツテ白い所へくろいものが着タカラヨケ眼立て白しやうぞくに仕たらよかつたニコリヤ由良の介が」衣装のあやまりじやないかいナア」(八才)

たしか啼タトしやうじをひらき」(詞)今時鳥がないたと思ふてみれば月ばかりサ。ナア二月ニワ鴨サ。バカイ正月に時鳥といふことはどこでもきまつた事サ。ソレジャ奈良で出る月は鴨ダ。ナゼ仲磨の歌ニモ三かさの山に」出し月鴨デワないかいナア」(八才)

歴々の御方々さへくろうをなさる」(身かはりおんど)いにし多田まんぢうゆめまぼろしの世を觀じ」(詞)エ、コ大そふあまいものがすきと見ゆる。ナゼたゞの饅頭ダと思ふてムヤミニ喰ぢがおこつダロ。バカイエあまいもの喰てぢがおこるといふことがあるカエ。ダケドあまいぢにちがいネイナゼ。ハテゆめまぼろしの」ようかんじではないかいナア」(九才)

そらもよいのにびかぴかひかる」(詞)申旦那様此比は每ばん光り升ネエアリヤ稲光りといふて光るたびたび稲に実が入てよく成ノジヤソリヤ私もまくらははづさないやうになつたはづさナゼおまへさんがまいばんひかるので私も」居寝がよく成のじやないかいナア」(九才)

月はさゆれどわたしの胸は」(ゆかりの月)せもふたのしむまこととまことこんなゑにしがからにもあるか」(詞)ヨウホドヨイにしんを喰たと見へるナゼこんなエ、にしんがからにもあるかとイツテイヤガル。バカイエ赤繩とは女夫中むつまじい事サソレジャにしんにちがひネイナゼハテ中むつまじケレヤ」数の子も出来るじやないかいナア」(十才)

ねてもさめてもたゞわすられぬ」(詞)横蔵メガ?の巻を仕てヤラウト思ふてイヤガル。ダガアイツワ眼一シヤネエカ。ナアニひがらめだナゼハテいつでも」藪をにらんでおり升る」(十才)

縄もかけずにたゞぎりずくめ」(浄るり)おまへがたも精出してお

せめなさるが身のおつとめつとめといふ字に二つはないア、うきよでは有ぞいナア。」(詞)ぼんといふたは」チツト阿古屋じやないかいナア」(十一才)

羅刹女とはみな鬼の子よ」(詞)浜のはかへ参つて見ば鬼の姿で脇立ワナらせつ女ダチヲ此間だ参たがくらくて見へなんだがアリヤ金仏かナア二木ぶつかアヤ石仏かナア二土でして土仏かバカイエソレジャ仏ぶつだ。アリヤ浜のはかの」米櫃じやないかいナア」(十一才)

梅にとまりし小とりをさせば」(詞)ソコエ老僧がとふりかゝつていつも愚僧が念仏をとなへてやると助るにけふはナゼとられたと見れば小とりが。ほかのとりなら念仏でたすかりませふがわたしは念仏では行升ぬナゼハテ驚ダカラ」ホウ法花きやうでござり升」(十二才)

うしにひかれて善光寺まいり」(詞)アレヤ何をいつたものだ。思はずもけつかうな所へまいるといふたとへササ。ソレジャお七はぢごくへいつたる。ナゼ」馬にひかれて行わいナ」(十二才)

十五『よしこのいろは廻し 冠の巻』

(嘉永四年序。大阪市立中央図書館蔵。916/100/1851)
 本書は作者不明であり、時代からして著作権は消滅していると考えるのが常識的判断である。
 本書の翻刻については、大阪市立中央図書館の許可を得た。(平成二三年一月一日付)
 よしこのいろはまはし 冠の巻」(表紙)

発記 好仙亭長東
 都にも時をつくりこの鶏がなくあづまのふしをつ?のひろめつ
 好此亭玉助著」(見返し)

浄家の四十八願はしらす。義士が四十八人は。彼いろはの仮名文字の。一字を各頭にいたゞき。山々川々のあひ言葉。素懷を遂し美談を残す。そのいろは廻の四十八首は。一首を折々唱ふていたゞき。山はあらねど川の字を横に三すじの呂律にかなひ。おひ?うけ?余慶をのぞむ。よしや童戯のいろは譬へ」(一才)イロハ講釈いろは歌。是等の仲まははぶかれても。いろは廻しはよしこの天狗。粹などこへは以て来ひ。此上なからはな高き。御評判にあつからんと。

序に書そへて？？ふ四十八。

嘉亥の秋 好文亭狸「(一ウ)

附言

百済の王仁がよめる。難波津に開や云々の歌を。浅香山の歌に併せて。これを手習ふ幼児に。教し昔の風俗は。色葉雖句の歌にvari。飯字の書体も。昔々は甚かはりぬ。かはるといへば好此百々。此名目も当初。ヨシコノコシヨシコノコシ ドドイツドドイツドイ。などゝはやし余波ながら。難波津に咲く此花の。此といふ字に兼葭の。よしといふ言を添て。よしこの名を更ざるも。恋の手習情の清書。いろは廻の縁による。牽強附会をな咎給ひそ。

買山人玉助「(二オ)

(絵)「(二ウ・三オ)

よしこの

逢ぬつらさに寝ぬ夜もあるか「(一中ぶし)あだに粟津の晴嵐と心でとめしむつゞけにあらしははれて一時雨ぬれてあふ夜は寝てからさきよ」あへばやつぱり寝らりやせん
よしみ連には夜ごとの茶話ありてそのむつみ？？深しとなん其人々の心のほどをあだなもんくにいふて見ればこんな琴でもあらんかと

連外一個の戯客 狂蝶亭花升述「(三ウ)

よしこのかけあひうた 以呂波廻し

玉屋玉助作

いろといふ字にまよふてからはは字をかくの moi とやせぬ

ろには嫌はれ權にはふられたよりなきさのすて小舟「(四オ)

はなれまいぞへ柳に乙鳥どんな嵐がふくとても

にどの勤に身をくだくのもかねがたきの火打石

ほれたお客に背中をむけてゐるはざしきのうら表「(四ウ)

へんじ聞かねば放さぬ手先恋もひとつはちからわざ

とかくおまへの心がしれぬ初手はこゝろに惚ながら

ちがひ棚とはこゝろもつかず床でくよくよまぢ明す「(五オ)

りんきしたとて浮気は止めじやといふて悋気もやめられぬ

ぬしの寝言に耳そばだてゝこゝろあたりの物おもひ

るすはわたしに任せておいてぬしは気まかせ足まかせ「(五ウ)

をしき筆とめ候とは書いていくつもいくつも返すがき

わたしや三絃ぬしや南草盆酒がとりもつかりまくら

かりた挑灯あやしい家名とてもあかりが立はせぬ「(六オ)

よじやう半でも所帯は所帯金をすてたは初むかし

たれに逢ふやら気もひやひやと雪にふたりがもやひ傘

れいのひとつも言れぬ事で苦勞するの誰ゆへぞ「(六ウ)

そへばどれやひそはねば不実どのみち奇麗に言はれやせぬ

つるべ放さぬアノ朝がほはわづか一夜の縁のつる

ねぐらはなれてとぶ鶯を梅が見おくるさらば垣「(七オ)

なにをいふてもさはがぬ硯墨はひとりでくろうする

らくがしたけりや是程までにぬしに憂身をやつしやせぬ

むねが家なら苦勞は煤よそれを掃にはさゝがよい「(七ウ)

うれしさうだよつがひの蝶は花の露をば口うつし

あなか育のアノ姫百合も今はみやこの床の花

のいた当座に腕を見れば文字の手前もはつかしい」(八才)

おやの網をばふたりで抜て不自由ながらも魚と水

くぜつなかばにアレほとゝぎすないてすねたもひやうしぬけ

やまの奥にも妹背の道はあると妻こふ鹿がなく」(八ウ)

まてば甘露の日よりとやらをしんきくさゝの不了簡

けにもはれにもひとり男見立違ふてなるものか

ふみを丸めて品玉つかひ見つけられまい恋のたね」(九才)

こひの手習はじめてからはとかく逢ふのをまちづくし

江戸の男に真実ほれて東まくらも気はこゝろ

てがみ封じて又一思案たれにもたせてやらうやう」(九ウ)

あはぬむかしがますかけ筋よ手には小皺の苦労性

さゝを過して無理いふ竹を粹で寝させる夜半の雪

きずい気儘を互にいふて泣て笑ふて中がよい」(十才)

ゆきのふるにも通ふじやないかちつとは積つて見たがよい

めさき利して銚子を替に立たあとにはさしむかい

みづの出ばなのおまへが浮気いつも見流し聞ながし」(十ウ)

しのぶ戸口に尾をふる犬は義理にあしたはみやげ物

えんは結んでまだ帯解ぬ籠のつくひす室のむめ

ひとの手前ですげなうするをまさか腹たつぬしじやない」(十一才)

もとは浮気で連そひながらうはきさんすりや腹がたつ

せじと器量と初心いき恋の目利も上手下手

すへのつまりを案じる胸に好なたばこも通りやせぬ」(十一ウ)

京と難波になじみをもちて心ひかるゝ淀のふね

いろは廻し畢」(十二才)

十六『いろはかな冠どゝ逸』

(嘉永七年序。菊池所蔵)

野狐庵こと仮名垣魯文は明治二十七年に没している。

國學院高藤田小林文庫に同じものがある。菊池本は五ウ・六才の

一丁欠。國學院高本にて補う。上田市立上田図書館花月文庫『都々

逸合本』(音楽388)、東京都立中央図書館東京誌料『辻うら都々逸』

にも同じものがある。

いろはかな冠どゝ逸

野狐庵編

一盛齋画」(表紙)

いろはかなむりとゝいつ」(見返し)

倭歌を吟で。猛鬼神の心を和らげし。雲上人は。侍人に会て詩を献

じ酒呑に。劍菱の酒札をあたへし。不意の幸福なり。雅俗今昔の人

情を察すに。雅人俗人をもなごりて。文盲と呼ばは俗人詩人を嘲て。偏

屈と称ふ大鵬燕雀を笑へども。藪蚊の眼毛に巢を喰ふ。に。へこ

まされたるためしもあり。過たるは猶不及と。吾輩の田夫へひく無

益論。餅はもちやと発客の。主人が目ざす墮落者四十八字のとゝ一

を。足下述意はなぬかいなと鼻唄交りの注もんちやく。おつときた

さと請合拍子例のずるけの催促も。まゝよまゝよで半月計り横たに

かぶりを振ながら。意趣とか何とか頭号で。金針の折倉卒にやうや

く??た。仮字の清書蚯蚓のかたくり涎童。頭上とゝもに。かくの

な(オ) ないてうれしいゆふべにかわりわらつてせつない此ざしき
 ながい浮世にみじかい命けふも内へはかへしやせぬ
 らちもないことさもぎやうさんにないてじれたりわらつたり
 らくなくらしものぞみはないがくがゐはなれて友かせぎ(七ウ)
 むすんだまゝなるかれ野のすゝきにくる夜風が身にしみる
 むねにくぎうつてかはつたおへやのいけんざりとなさけはつらいも
 うたぐりぶかいとさげすまるゝもみんなおまへのためばかり
 ういたつとめでなさけはうれど心にかげがねしやうもある(八オ)
 む居つゝけもたまのことだとひと夜がふた夜つもるおもひが身のつま
 ののちはたがひに心とこゝろ初てはうはきが小たのしみ
 ののこりおしさにあと見をくりて月をあいてにひとりごと(八ウ)
 おおしのうき寝はくがひのふちせやがてくもゐのめうとづれ
 おつなほりからつぬかふなつて今じや人にもきがねする
 くろふするがのふじの雪とけぬおもひに身をこがす(九オ)
 ややくやもしほに身をこがれつゝぬしをまつをのうらの茶や
 ままゝになるよでならないからは出雲にもめでできたのか(九ウ)
 けん番の札をけづられどきやうのねじめどふかいとみちつくだらう
 けんくわしてせなかわせも夜風がしみて寒くなつたとなかなかり
 ふふられながらもまだうぬぼれてたまにやひとりでねるもいゝ
 ふたつならべしこのまくらはしわたりにふねとはこの(十オ)

こ小なべだて雪のあしたのいつゞけ酒もかぶるときやうの三つぶとん
 こゝろにかわりはゆめさらないがすねて見たいが恋のよく
 え江戸の夜たかはなにわのそうかそわぬながらもひとよづま(十ウ)
 てつぼうの玉のおとづれ気も飛道具ぬしのはなしはからばかり
 てづるもとめておくりしふみがいまはうき名の評判記
 ああげる花火とうわきな恋路によりましたるあとがない
 ああかるひしあんにがついでるならばこいのやもちにやまよせぬ
 (十一オ)
 ささあけんをとつてなげだす女房のりんき文なら角でもはへるだる
 さ里のいきぢで今までよんでなんで浮気をだす物か
 ききくたびにもしやぬしかとかうしにすがりきけばすけんのそゝりぶ
 しきりぎりすなくや霜夜にはる長見せもおまへゆゑじやと目になみ
 だ(十一ウ)
 ゆゆめでみめぐりくるかとまつちあへばこゝろもすみだ川
 ゆきつもどりつこゝろでしあんうちのぶしゆびもあんじられ
 めめくらへびぢやと世のくちなわもすへの手だての山かゞし
 めめはしきかしてそのばをはつしたれしもこいぢはおなじごと(十
 二オ)
 み道をみちで立る気なればなにいまゝでもよこへそれたる恋はせぬ
 しみれんらしいがきれたはほんのとうぎのがれのくちぶさき
 ししあんするほどしやんはずにたまにでるのはぐちばかり
 しゝうそうしたりやうけんならばいまがしあんのきめと(十
 二ウ)
 酔酔ざめの水にすましたくぜつのもつれはらのさつじのかんびよウす

な ないりつばにいふては見たがあととしあんをきめてから
 ら ちもあかずまだひとだのみどうなることかと身をくやむ
 む ねにてをえてこれからさきのとげるしあんの一ト工風
 う いたつとめにころのしづみはでなとちぎけくのせかい五
 才) あつゞけにゆきをかこつけながしちやみたがあとであはれざひ
 ゐ んなもの
 の びあがりかへるすがたを見おくるたびにとをくへだゝるかほ
 と かほ
 お おもふいちづにやてなべもまゝよふるいもんくのやまのおく
 く くるくるとまいておさめてしめたとかいたふでにちかいのふみ
 の あや(五ウ)
 や やぶれかぶれとかよふたばちかつゞれひとへのいまのさま
 ま まてどきはせずつひかんしやくのどくとしりつゝちやわんざけ
 け けんむほろゝな一ぱいきげんのむとじれるがぬしのかぶ
 ふ ふとしたことからつひとをざかりにかいせかれてだんばし(六才)
 こ こらへじやうなくつひいひだしてきいたもおもへをおもふゆゑ
 え 絵馬へおろしたころの錠をあけていはれぬちかひだて
 て つめとなるほどときやうがすはりどうなることかよこれがま
 ア 青柳のいとつながれまたたぐられてだまやしやくりがなほつ
 あ らさ(六ウ)
 さ さげのきげんでいふては見たがさめりやひとりでくやみなき
 き きれもせずあいもならずの身でいるならばしほれすがたにそで
 の つゆ
 ゆ ゆめでなりともたゞひとことのわけをいわふとおもひつめ
 め めのふちもはれてあはれぬそのぢれつたさしのぶくぜつのもつ
 れ がみ(七才)
 み みかへられたと思ふちやあれどうすりやくるかともものあんじ
 し しつづからしいが夜あけぬくにおちおちねたいとしのびごゑ
 ゑ ゑがほつくりていぢぎへせじもはやくきゝたいぬしのしゆび
 ひ ひとめかねるはじめのことよきながたつたらあくまで(七ウ)
 も もろともにしつぼりたのしむかりねのゆめがさめてくやしいた
 き のあせ

せ せけんみぬとてまたそのやうになぶらしやんすなとしのかず
 す すんだす井戸でこのどろみづをあらふてそいたいみのねがひ
 (八才)
 <以下省略。奥付ナシ>

十八 『いろはどどいつ』(仮題)

(安政三年序。名古屋市蓬左文庫蔵。『どど一合本』のうち、第一。
 尾 19-156)

一 筆齋英寿こと景齋英寿は生没年不詳だが、幕末に生きた人であ
 り、著作権は消滅していると考えるのが常識的判断である。

本書の翻刻については、名古屋市蓬左文庫の許可を得た。(22
 指令教達第22号の2)

(表紙欠)

江戸にもてはやす。どゞいつぶしといふものは。京大坂。其余の国
 に。可是節と云。尾張辺にてなごやぶしといふ。東北国にてはにい
 がたぶしといふ。西国にてはぶんごぶしと云。其名おのおの。かは
 るといへども。章句は皆此手爾於葉を以。三弦の曲をそゆるものな
 り。夫いへども。端哥の流行。不絶といへども。しばしの口ずさみ
 にして。往古より。今に愛して。捨ざるものは。此よし此ぶしに及
 ぶものなし。されば。今いろは文字鎖の新芽を吹出し。ときはの松
 のいつことも。さかへん事をねがふ。幸に高評をたまはらば。板元
 作者のよろこび。此上やあらんかし。
 安政三辰春新刻。一筆齋英寿誌(一才)
 いまにくるかとおまへのうはさうかうかはなして夜あけごろ
 るじをたゝかきもいそぎあしげたとせつたのかたちんば
 はれてこよひはふうふのちぎりねがひかなふてこのやうに(一ウ)
 にげてそおうとやくそくしたかすへをあんじてひとしんぼ
 ほうばい女郎やおへやでせかれきるかきらぬかこんくらべ
 へいせい他人とおもふていたがこふなりや女房よこちの人(二才)
 とにもかくにもおまへのかをたてたわたしがむねのうち
 ちからづくにもいかにぬはこいぢそれをたつのはさきのむり
 りづめかけられきては見たがいまじゃかたときわすられぬ(二
 ウ)
 ぬしのかほ見りやうれしさあまりちわがこぶじてぐちが出る

留すを目がけてしのんできなよほぐにやさせないかのことを
 おつなことからついでふかくなりもしやしれたらまゝのかは(三才)
 わるひことだとしりつゝほれてのぼりつめたるこいのさか
 かたきどうしのすへかもしれぬあへばくろうがなをますよ
 よくよくおもへば身のつじうらかとなりさしきであのはうた(三
 ウ)
 たがひのいきぢでそひとげたもの義理の二字からいきわかれ
 れいのしやくじやときやくおばだましぬしにそひねはつみなうそ
 そんな心とゆめさらしらすまことあかしてはらがたつ(四才)
 つまとさだめてもふあきのそらかはりやすひはぬしのむね
 ねじめきめてもてうしがくるひあはなきや思ひがますはひな
 なさけないほどじやけんぬしにほれたわたしが心から(四ウ)
 らちもしだらもないせうのくろうわすれたいとやけでのむ
 むねにいちもつありあけ月よぬしがいはなけりやわしがいふ
 うそをうるのがせうばいがらとうたぐらしやんすかわしやつらひ
 (五才)
 むかりおろしてついとまり舟ながれわたりはいきなものを
 のめばこゝろはわしやすみだ川はなにもいろかのあるものを
 おまへとそふならてなべをさげてたとへ野のすへ山のおく(五ウ)
 くがひのつとめおみなわれゆへと人のそしりもはづかしや
 やさしひことばはおまへの手事たづなゆるさぬむねのこま
 まぶをせかれてふさぐをしらずうはきどふしがわるぶざけ(六才)
 けふのやくそくおいでもあるがもしやさはりと気がまよふ
 ふみでいはしたおもひのたけがとゞいてうれしけふの床
 こゝろのこしてたてきるせうじまたもひかるゝぬしのこへ(六ウ)
 えふてできぬといはんすけれどかくしげいこそぬしの得手
 亭主にやうぼとさだまるうへは此身はおしまぬなんのまあ
 あさのわかればかくごでいれどけふのおもひの其つらさ(七才)
 さすがいやしひあまの身なれど恋に上下のへだてなき
 きがねくろうは恋ぢのやみよはれていろますはなのつゆ
 夢さめてみればあとなくたゞはうせんといひとさびしきのあ
 め(七ウ)
 目おばむき出しはらたてさんすわけをきかんせこりやよしみ
 しのゝめがらすをにくひといへどかはひかはひとすいなこゑ
 ゑんがあらやこそまたあいおひのまつのかひあるけふのしゆび(八
 才)

人のねがひもとゞけばかなふ思ひはれたるけふの雲
 もしやくるかとゆさへもいそぎどこかあらつたとおもはんせ
 せかれなぶられわしやかこのとりこよひもひとりでなきあかす(八
 ウ)
 すいたどうしが世にあふかさでせたひするのほきのふけう
 けふといふけふたがひのむねがはれたためうとでおめでたい
 《以下省略》(九才)

十九 『端唄部類 一編』

(万延元年序。歌沢能六齋序・編。菊池所蔵)
 (歌沢能六齋(萩原乙彦)は、文政九年(1826)生れ、明治十九年
 (1886)没で、著作権は消滅している。)

端唄部類二編と逸の部
 歌沢能六齋集

いろはしりとり
 いつかほころぶ蒼の花のかほにほんのりさくらいろ
 るんはなほいそへさつしなさんせぬしゆへけふの此しらは
 はづかしいとていはすにぬればゑもじれつたいおたがひに
 にくい秋風まよひの果はあなめあなめのすゝきの穂
 ほれた中でもがまんはできぬよぎをかぶつてすかしの尻(四才)
 へんなことからつい遠ざかりしらくぬかほとはつみなひと
 としまざかりをしらはのまゝでくろふするの親のぼち
 ちゑんちかづき皆かりたをしこゝろがらからこのふぎり
 りんきらしいがいはすにぬればすへがどふやらおぼつかぬ
 めしに二日もあはずにぬれば風のくさめも気にかゝる
 るいがともてあの子と君はもゝとさくらの顔とかを
 をもひまはせば此身の泣(なき)もめくるいんぐわの車の輪
 わざとけなして又あるときは(四ウ)むねてのろける深い中
 かほりゆかしき蒼の梅もやがてひらけばちる浮世
 よしあしを定めがたなき身のなりゆきと水の流や浪花湯
 たにながましいおまへのしうち心おきなくしておくれ
 れいのかんしやくも切(これきり)といふは出たらめみんな嘘
 そふてふたりがくもせぬならば死んであのよでうちをもつ
 つらいつとめの座しきをひいて今じやしうとで又きがね

れんじがしらめばおへやへきがねすそにかくるゝながるうか」(四ウ)
 それよりしてよあけがらすにつひおこされてあかぬわかれのほとゝぎす
 つきぬゑんかよ恋しきひとにめぐりあふたる高やさん」(五オ)
 ねぐらいづこそぞの雁よ月もてらすにふたりづれ
 ないてうれしいゆふべにかわりわらつてせつないこのざしき
 らちもないことさもぎやうさんにないてじれたりわらつたり」(五ウ)
 むすんだまゝなるかれのゝすゝきにくひよかぜがみにしみる
 うたぐりぶかひとさげすまるゝもみんなおまへのためばかり」(六オ)
 むつゞけもたまのことだとひとよがふたよつもる思ひがみのつまり
 のちはたがひに心とこゝろしよてはうはきが小だのしみ
 おつなはりからつかふなつて今じやひとにもきがねする」(六ウ)
 くらひいゝわけはれたときいてすこしあんの明りさす
 やくやもしほにみまをこがれつゝぬしをまつをのうらの茶や
 まゝになるよでならぬがうきよかさきてくらしなひとゝろ」(七オ)
 けんばんのふだをけづられどきやうのねじめどふかいとみちつくだ
 ろう
 ふられながらもまだうぬぼれてたまにやひとりでねるもいゝ
 こゝろにかわりはゆめさらないがすねてみたひが恋のよく」(七ウ)
 江どのよたかはなにはのそうかそはぬながらもひとよづま
 てづるもとめておくりしふみがいまはうきなひやうばんき
 あげる花火とうわきな恋じによりましたよあとがなひ」(八オ)
 さとのいきぢでいまゝでよんでなんではきをだすものか
 きくたびにもしやぬしかとかうしにすがりきけばすけんのそゝりぶ
 し
 ゆきつもどりつこゝろでしあんうちふしゆびもあんじられ」(八ウ)
 めはしきかしてそのばをはづしたれしも恋路はおなじこと
 みれんらしいかきたいほんのとふざのがれのくちぶさぎ
 しあんするほどしあんはずにたまにでるのはぐちばかり」(九オ)
 糸いざめの水にすましたくぜつのもつればらのさうじのかんびやう
 する

ひろひせかひに三つのめいしよふじにまつしますみだがは
 もつれかゝつた恋路のいきぢうでやちからでいくものか」(九ウ)
 せめてひとよはふじのゆきつもるおもひをうちとける
 すへのすへまでもつれてとけてむねのやなぎに恋のかぜ
 けふといふけふはれてのめうとありの思ひもてんしやにち」(十オ)
 《以下省略》

二十一 『しん作いろはしりとり並に五十三次都々逸』

(矢倉山人。明治初年。関西大学図書館蔵。H911.91/S9/1)
 矢倉山人は、正体・生没年不詳だが、時代から考えて、著作権は
 消滅していると考えるのが常識的判断である。
 しん作いろはしりとり並に五十三次都々逸」(表紙)
 しんさくいろはしりとりどゝいつ
 五拾三次沓冠都々逸
 矢倉山人画作筆」(見返し)
 こゝろいきいろはしりとりどゝいつぶし
 いろをするなとおやちやいふがわたしはどふしてうまれたる
 ろうそくのしんをきらねばあかりがたゝぬくらい所でちよつとちは
 はだしまいりはおるかなことよどふぞおまへとそふよふに」(一オ)
 にくいしうちとおもふがぐちよわちきやむりでもよこれんほ
 ほどのよいのについほれこんでけふもふうふでひとつなべ
 へたなすまふじやわしやなけれどもいれておくれよぐゝるきと」(一オ)
 とこをよくしてもしたゝみがへ内証咄しもこのうち
 りくついつてもいけんをしてもはやいかへりであいたゝぬ
 ぬしのくるよはなをさらさびしこひゆへなにかにくろうする
 ちよくでのむのはすこしはよいがまたもできるよさけのかり」(二オ)
 るすをするみのわたしじやものをおそいかへりでまたくるを
 をいらんになつてあげやへそとはちもんじこれもくがいのひとくる
 わ
 わたしばかりにせうたてさせておまへうわきですむものか」(二ウ)

をもいまはせば此身の泣もめぐるいんぐわの車の輪
 わざとけなして又あるときはむねでのろける深いなか(四才)
 かほりゆかしきつぼみの梅もやがてひらけばちる浮世
 よしあしを定めがたなき身のなりゆきと水の流や浪花がた(四ウ)
 たにんがましいおまへのしうち心なきなくしておくれ
 れいのかんしやくもこの切といふは出たらめみんなうそ(五才)
 そふてふたりがくらしきをひいて死んであのよであつちをもつ
 つらいつとめのざしきをひいて今じやしうとでまたきがね(五ウ)
 ねんがとゞいて手いけとならば朝ばんたのしむ床の花
 なさけしらずがまつ身をしらでけふも来ぬとは何じややら(六才)
 らくなやうでも多く(ママ)客のきげんとる身は気がいたむ
 むりな義りづめむたいなくどきいやといわれぬどふしよう(六ウ)
 うそかまことかさつぱりしれぬさきでもしれまいわが?
 んどばたの桜あぶなしおちてはいけぬしかとからんでさらしぬの
 (七才)
 のんでのまるくせならよしな捨てしまをうこの酒を
 おし鳥と人にいわれた二人が中もひよんなことからひとりなく(七
 ウ)
 くやしい思ひも男のふじつほんにもつれたむねのあや
 やかましい世間しらずがおかやきもちでなんのえきない人のじや
 ま(八才)
 まてど来ぬ夜はついかんしやくでどくとしりつ茶わん酒
 けさのわかればいつよりつらいなせかじれつたいきのふけふ(八
 ウ)
 ふくささばきに手かげんおぼへほれたころを茶通箱
 こころがらじやとせけんひとにゆびさしされるもおまへゆゑ(九
 才)
 えんりよするのをはじめのうちよいつか心もうちあけて
 てんにいやならなぜかうなつた今さらいやとはほんにまあ(九ウ)
 あきもあかれぬ(ママ)せぬ其中を義理でわかれる其つらさ
 さらりと切た人にはいへどかげじやみれんでしのびなき(十才)
 きいて北野の梅とはおろかさても見事な花のまゆ
 ゆふべのうつりがまださめやらで又なつれしきけさのゆめ(十ウ)
 めなみやさしき小さいその浜へじれてぶつかるあだをなみ
 身から出たさびつきはなされて今は野中の破からし(十一才)
 しみじみとつらいつとめのしんぼつするも心がらだかおまへゆゑ

糸んと時せつをまつともしらずさきは平気なかたおもひ(十一ウ)
 ひさしいものだがむしづがはしるかつておくれよさつまいも
 もしひよつとかはりやせぬかとあんにてぬれどわざとじらしてうた
 ぐらせ(十一才)
 せたまかためかたぎになつて酒ものまねばいろもせず
 すへにかうした世間へかざる花もたがひの実意づく(十二ウ)

二十三 いろは尻取集

(明治初年。名古屋市蓬左文庫蔵。尾 19170)
 作者弦月楼西夕は正体・生没年不明であり、時代から考えて、著
 作権は消滅していると考えるのが常識的判断である。
 本書の翻刻については、名古屋市蓬左文庫の許可を得た。(22
 指令教蓬第19号の2)
 風流都々一
 いろはしりとりしふ
 雪舎ゑらみ
 春近筆(表紙)
 いろは尻取集序

夫都々の言葉の花のもとには狂ひ出る意の駒を誰か繋ぎざらん
 と??を?して引出す其三味線の調よき工風は万国一の糸きれてつ
 ながるいろはのしり取是?粹家の新趣向とすまぬ筆に鞭をあて思
 はず知らず人なみに三本足らぬ智恵をふるひころの猿の?昇り高
 くとまつて序するものは
 三河 弦月楼 西夕(見返し)
 いろもかほりもモウさめはてちるは当座の花ころ(トヨハ
 シ 緑水)
 ろんはなひぞへコレこのやうに身をば落してそひまつば(トヨ
 ハシ 道み)(一才)
 はまりこんだる身は恋地ごくどうで邪見なぬしはおに(トヨハ
 シ 緑水)
 にげてばつかりアレにくらしやいつかわたしにあきとんぼ(ト
 ヨハシ 出たらめ)(一ウ)
 ほんに流れのけふあすか川淵瀨定めぬ身のゆくへ(トヨハシ
 鳥声)

へだてごころのあるゆへまゝにならぬまがきの内と外(トヨ八
 みそじ)(二才)
 シとかく邪見ナ後家蓋どびん添はせまひとのさしでぐち(トヨ八
 緑水)
 シちからつけられ気をはりがねのたより今やとまつばかり(白ス
 一笑)(二ウ)
 りん気しみづのわきたつ胸はくめど思ひがつくされぬ(トヨ八
 青山)
 シぬしの性わるしたぢの嘘がはげて地金の出るきせる(トヨ八
 一玉)(三才)
 るすの上首尾三味せんまくらつみな恋ちをしたんざを(トヨ八
 緑水)
 シをしき別れにきえ入おもひ泪ながれの水のあわ(トヨ八シ 西
 夕)(三ウ)
 わわたりしやおまへにさびつき刀おもひ切るにもきれぬ中(二カ八
 思顔)
 かかゝる辛苦のそのかずかずをぬしにあかしてほし月夜(トヨ八
 緑水)(四才)
 シよくにすがつてきれないなぞとうそのかわ緒の薄情下駄(トヨ
 八シ 一瓢)
 たたよりなくなく心もくもりはれぬ涙の袖しぐれ(トヨ八シ 一
 玉)(四ウ)
 れれんじしらみてあくる夜うらむ廓(サト)の手くだのくろいう
 そ(トヨ八シ 道少)
 そそのしれたるごころのうちは浮気流れの浅瀬みづ(トヨ八シ
 出たらめ)(五才)
 つつらき流れに身はこひこがれ浮てたゞよふまよひぶね(トヨ八
 緑水)
 シんが明けたらモウしめだいこぬしの気まゝになるわひな(トヨ
 八シ 出たらめ)(五ウ)
 なないて真事をつちあけからす声もなみだにくもりぞら(トヨ八
 緑水)
 シらちのあかない年季にねんをましてせひなく身をうらむ(トヨ
 八シ 鳥声)(六才)
 むむりな恋じのすへとげたいとおもひわづらふしやくのきつ(ト
 ヨ八シ 雄子)

ううき名たちまちくちはにつきのはれて添われぬわび住ぬ(白ス
 一笑)(六ウ)
 カあゝもたつてもわすれぬおまへそへりやひん苦もなんのその
 (トヨ八シ 鳥声)
 シのろけこんだるうどんナ客をいやとふりかけ花かつお(トヨ八
 出たらめ)(七才)
 シおしのつよ弓ひく気でゐても客は落武者逃したく(トヨ八シ
 緑水)
 くくろふする身のひとつのねがひふたつ枕にしてほしや(トヨ八
 緑水)(七ウ)
 シやける思ひに辛抱もをれてまとにならくの火のくるま(トヨ八
 西夕)
 シまがり根性の我まゝそだちいづれきり出す若妓(トヨ八シ 緑
 水)(八才)
 けけふかあすかとまつ身をつるゝほんにたよりは玉しのぶ(ト
 ヨ八シ 道み)
 ふふつとごころの恋風かわりうしろみせたるやつこだこ(トヨ八
 シ 鎗安)(八ウ)
 こごころ細さよひと夜のちぎりよそになり行竹のふえ(トヨ八シ
 西夕)
 ええりについたる此身のあかをぬしにあかしてあらひたて(トヨ
 八シ 緑水)(九才)
 ててなべさげてもそいたいの身思ひきらりよかなんのまあ(ト
 ヨ八シ 出たらめ)
 ああきのけしきかたよりも今は遠くなるこの身のつらさ(トヨ八
 シ 鳥声)(九ウ)
 ささそふあらしに気もそわついてなびき初たるいとすゝき(トヨ
 八シ 一玉)
 ききざな音づれ秋たつ雁にちるは尾花の袖の露(トヨ八シ 山
 毛)(十才)
 ゆゆすりとられて姿も今は思ひやつるゝ若木むめ(トヨ八シ 一
 玉)
 めめうと結びにこころをこめて送る恋じの封じ文(トヨ八シ 松
 風)(十ウ)
 シみみは恨みてきへーいりたいはつらき浮名のながればし(トヨ
 八シ 一瓢)

し しみじみかなしくまつ夜の床へしんとひゞきしかねのこ糸(トヨハシ 魚口)(十一才)
糸 糸がほどこるか日にましすねてにくやわたしに秋なすび(トヨハシ 一玉)
ひ ひゞのしんくに姿もやせて身はゞあまりし恋ころも(トヨハシ 鳥声)(十一ウ)
<以下欠>

二十四『じゞろいきいろはしりとりとんいつぶし』

(明治六年。写本。山形の人から購入した。山形訛りのようである。菊池所蔵)

本書は先行書を書写したものであり、著作権はない。

本文は『しん作いろはしりとり並に五十三次都々逸』とほとんど同じ。

こゞろいきいろはしりとりとんいつぶし
いろをするなとおやたぢやいふがわだしはどふしてうまれたろ
ろうそくのしんをきらねばあかりがたゞぬくらい所でちよつとつは
はだしまいりはおるがなことよどふぞおまへどぞふよふに(一才)
にぐいしうぢとおもふがぐつよわぢきやむりでもよこれんぼ
ほどのよいのについほれごんでけふもふうふでひとつなべ
へだなすまふじやわしやなげれどもいれでおくれよくゞるきど
ちよくでのむのはすこしはよいがまだもでさけるよさけのかり(一ウ)
とごをよくしてもしだゞみがへないせうはなしもとこのうぢ
りぐついつてもいけんをしてもはやいがへりであいたゞぬ
ぬしのくるよはなをさらさびしこいゆへなにかにぐるうする
わだしばかりにぜうたでさせでおまへうわきですむものか(二才)
るすをするみのわだしじやものをおそいかへりてまだくるを
をいらんになつてあげやへそとはちもんじこれもくがいのひとくる
も(ママ)
かんどうさせたはわだしがわるいいまにもふうふになりますよ
よめにゆぐのはわだしはいやよぬしがあるゆへよしにした(二ウ)

たんのふするほどおまへとねだいけふものろけで出るよだれ
れうけんのせまいむねからちいでることとわだしのいふことみんな
うそ
そそふしんしたちいぬしゆへにつきのおびしめうむはいつ
ねられないばんだとにやうぼなぞをかけおきておくれよもしだん
な(三才)
なじみのふみさへかぐてはもだぬおやのばぢかやあきめぐら
らしやめんになるのもみんなおがねがほしいなさけないからみをく
やむ
むめがはでつがいのこしをにぶばなにやりやなぎばしからゆくはつ
うそをうるなかでまことにかいあたりしやわせものだようらめし
あ(三ウ)
あうにいわれぬこのもづれがみとげぬはわだしがたりないの
のびるはるのひだいしへまいりおふもりみやげのうめびしお
おぐのざしきでおもしろそふにきやぐはすまふのあのだんく
くるふするのはおまへのゆへよらぐなうぢでもわただやいや(四
才)
やさしくされてもほかへはゆがぬぢやげんのおまへのわだしやつま
まつみなりやこそこのたゞみざんぬしがこぬよほどふせやけ
けさのさむさにかへされましよかゆきのやまやのこのとうふ
ふみはやつてもへんじはこないづれだんなはふところ(四ウ)
ことやしやみせんてならいしこみふみをしたゞめおんもとへ
へどのげいしやはみないきななりふねでうがせてねるがへで
てれんでくたでおきやくはよべどいまはふうふだなふかゞあ
あめのふるよもかぜふくよにもかよいくるはでさした(五才)
さだめなきよにさだまるへんはいづもへよぐのもあどやさぎ
きまゞそだちのやぶうぐひすよかごをはなれぬれるつゆ
ゆめに見てさへよいふじびたいとげてねだよのみなめざめ
めしをばゞふにこがしたげぢよつはこれはぼさつのふかいつみ(五
ウ)
みゞずのよふなるおふみをかいできやくをつるからおみなんし
じんすけおんなはなをなつまみじつにていしゆもこまるぞへ
ゑびすやへいつて見だせるあのごふぐものかつておくれとねだるお
び
ひとがどのよにやがふがまゞよわだしのすいだはさづまいも(六

オ) もとにまざるうらきはないとまだもはなさじことを見せ
せけんしらずといわんすけれどうぢばなわたしでぬしはす
すまのうらべでしほくむあまもやがてむかいでのぼるきよふ
きよふげんで見てもきれいなふわなごやいづもひいきでくるおきや
く(六ウ)
《以下省略》

二一五 『「開化」教訓いろは都々逸』

(明治十年。菊池所蔵)
同じものが国会図書館にもある。文化庁長官裁定のもと、「近代デ
ジタルライブラリー」で公開されている。菊池本は三ウ・四オの一
丁欠。国会本にて補う。

「開化」教訓いろは都々逸
吉田小吉編輯(表紙)

いろは都々の序
それ都々一は恋事の寄太鼓なりと兎守する童までよく唄ひぬれど十
が十皆恋にして色の淫事の媒なるをあやしま？唄わしめぬるは
あたら生娘を鼓舞して淫事を習はしめ見る穴に陥しいるの害あるを
うらみ今教訓のうた四十八を作りていろは都々一とし裁縫学の生徒
等が遊歩にて此うたを唄はしめ水の器に随ふ如く朱に交りて赤衣
を着る子供等ものゝさまは尊きものと(一オ)
知る如くしらずしらずに人たる道にも入るの追分と書集ぬれど浮世
に流行るそのふしの右左りさへ白髪のある開化の道の通人をたの
む矢立の筆もてなりと其足らざるを補ひて本調子の道に乗せ世の子
供等をして悪るがしこき道に迷はしめさらば所謂教訓の一つともい
ふべけれ
みちの奥伊達の茂庭
明治十年といふ九月
焼白しるす(一ウ)
イ 一日に一字なるふて一年たてば三百いくらのぬしのため
口 論より証拠ぢや勉強さんせ稼に追つく貧乏なし(二オ)

八 花は上野に咲花よりもしんぼする木の花がよひ
二 濁り水でも澄みさへすればしがらき濃茶の花も咲(二ウ)
ホ 本を読たり手習したり朝夕おそばにいて見たひ
へ 返辞よくして教の風になびけ心の糸柳(三オ)
ト 友だち持つにも気をつけさんせ朱にもまじれば赤くなる
チ 智恵はつけもの習へばしぜん山がら小がらもうたがるた(三ウ)
リ りんきするなと昔の人のかたかたおしへの立田山
又 縫よ針目によく気をつけて堪忍袋に智恵ぶくる(四オ)
ル 留守居大せつ火のもと大事夢にもわすれぬぬしのかほ
ヲ 親の御恩は袂にあまりゆきたけ五尺の立すがた(四ウ)
ワ 若ひうち何の気もなくなまけるものは老て便りもないわいな
カ かゆぬとこまでまふ手がとゞきかけば愉快かな手本(五オ)
ヨ 夜る昼るひまなく流るゝ水を見さんせ氷のはる間なし
タ たへ地織の木綿じやとても染りや赤くも茶にもなる(五ウ)
レ 連理とちぎりしおぬしの帯は人にや縫せぬわしがぬふ
ソ そだちよければ野菊でさへも鉢の植木の花仲間(六オ)
ツ 常の気候か其身のあやめ花に恥辱をかきつばた
ネ 寝たり起たりぶらつくよりは足袋の底でもさすがよひ(六ウ)

ナ 泣て居るより文でも書て友だち集めて読がよひ
 ラ 樂は苦の種苦は樂の種見さんせ夕べの二日酔(七オ)
 ム 無理なよふじやが呑む冷酒と親のいけんはあとできく
 ウ 恨みつらみは氣の持ちよふでなるぞ鬼にも仏にも(七ウ)
 井戸の蛙は此大空を四角なものじやと議論する
 ノ 呑だ酒ゆへ酔たはよいが醒めしあしたのはづかしさ(八オ)
 オ 大きなからだになつたが証拠親の御恩の見へどころ
 ク 口は猿をあくよなあけび口から五臓をなめられる(八ウ)
 ヤ 和らかに靡く柳の糸長々と野辺に織こむ横霞
 マ 実尽して世渡りすれば万国世界に鬼がない(九オ)
 ケ けんにかけても縫針業が出来りや恥てもありやせまひ
 フ 文の文句はめでたくかしくまへらせそるばん習わんせ(九ウ)
 コ こちらから丸くさへ出りやあちらはいかで角に出はせぬ窓の月
 エ 襟垢のつかぬうちから氣に氣をつけてころばぬ先きから杖をつけ
 テ (十オ)
 ア 天狗のつもりで鼻高ふれば愚品(ばか)な人じやといわれます
 ア あほげ団扇の骨おしませずに親の御恩のこのあつさ(十ウ)
 サ 三味線の引手ありとて心の駒の三筋の手綱はゆるすまひ
 キ

氣短に腹はたつまい短氣は損よ卵も切よで角になる(十一オ)
 ヌ 雪の中から取る竹の子は月より花よりまた見事
 メ 明月の空に曇らぬ心を持てば広い世界に隈もない(十一ウ)
 ミ 身の程を更にしらみてぶらつくものは恥をかくなり事もかく
 シ しんぼしなんせ雪間のわか菘やがてよめ菘の花がさく(十二オ)
 エ 縁は出雲にたのんだよりも早く結ぶは針の糸
 ヒ 人の人たる道ふみわけて磨き上れば玉のこし(十二ウ)
 モ もちやくちややみだれて捨たる糸も織ば綾にも錦にも
 セ せているのは歌でもよんでちりぬる心をおさめたい(十三オ)
 ス すきとすきなりや泥田の中で稲をかるともいとやせん
 京 今日から心の帯引しめて行儀直してぬしのそば(十三ウ)
 明治十年九月一日御届
 編輯兼出版人
 東京第一大区十二小区
 馬喰町三丁目十四番地
 吉田小吉(裏見返し)

二二六『情哥』恋のすがた見

(明治十五年刊。国会図書館蔵)
 本書は、文化庁長官裁定のもと、「近代デジタルライブラリー」
 において公開されている。
 「情哥(よしこの)恋のすがた見(表紙)」
 東の都々一西京の俚うた浪花のよし此名古屋の情哥所かわれは名こ
 そかわれど変らぬは恋かわらぬはこの作意にして恋情真肉の深きを

穿粹者にして必用の恋器なるを衆静堂主人の需に依りいるのは
の新弟子か四十八手合点のゆかぬ拙き文も四方通人の幸に三筋に掛
玉わん事只一ト筋に願ふもの仮名

不見廻家あるじ述(見返し)

いろは四十八文字しり取都々一
い気地と張とでたて切る障子こゝがしあんの立どころ
ろんより証拠と写真をだして是でも嘘かと詰言ば
はなを合せて口をば合せへそをあはせてはてはなに(一才)
にくらしいほどやさしい好とひとり蕩気て見る寝顔
ほれた惚ぬのその元たゞしやすいな鶺鴒が来ておしへ
へんな様子と立ぎゝしてわからぬ硝子の内とそと
とふからわたりは秋風なれどきれるはお金を取てのち(一ウ)
ちわや口舌で夜があけるほどあるぞへ言たい事ばかり
りんき言すぎ背寝されておしやこの首尾まゝならぬ
ぬしをまつ夜は他の足おともあたにやきかぬよ耳たてる
るすと見こんできた此首尾と手拭とつたる好のかを(二才)
をもちぬ首尾したそのうれしさにまけて恨もきゆる契わ
わが身ながらも我身のまゝにならぬ我身のこのいんが
かどの人目の途ぎれぬうちにはしので這入れぬ宵月よ
よふにた声じやと思案のむねのさはぐ二かいへ気がういた(二ウ)
たれでもおいでのいか物ぐいで時なし馳走のはらふくれ
れい酒かわらけこよいぞふたり添へるも親御のじひゆゑぞ
そへにやもらふたこのかんざりの玉をお数珠の粒にもつ
つくしあふたる苦勞をそつた当座の二人がはなしだね(三才)
ねづみとらずの若旦那とき猫がねらいをかけそふな
ならべ立たる朱ぬりに照れて嫁のあからむ新まくら
らくを末でと今このくろいつはりあるまい神たのむ
むねに手をあて心をくだきおもひ廻せば夢のよう(三ウ)
うその涙にぬれ手で粟の金のめうががおそろし
みひわけくらしと女房が傘の借処値問いにいだすつ
のせて世わたるわたしの舟へさしてあまたにかはくさお
おちかい内にと着せかけながら出す舌羽おりに唾がつく(四才)
くろうつしたかひ今日はればれて添るはなしも粹な親
やいてつのだす蝸牛女房いきなりぶちわるなべやかま
まゆ毛につばとは知りつゝかよひ知りつゝはな毛とツイのろけ
けふもけふとてゆふべの首尾のうれしかつたとのろけいふ(四ウ)

ふたりこふして喰ツてるとこを女房が見たらし胸団子
こふも夜ふけてまだこぬぬしにむねのおどろく犬のこえ
えんと月日をまてよとのばしいやといふまでするてだて
てくだの車にツイのせられてくやむためいきまたもああ(五才)
あへばうらみをいふ気でいたがあへばうらみも出ぬものさ
さけの上でのツイでき心おもはず乗ツたるくちのさき
きれるきれぬのはなしもいつかかわつてうれしいおとすまゆ
ゆめではないかとゆめみながらも夢に夢見るめうなゆめ(五ウ)
めだつくるうのこのやせ顔をそつと鏡へしまいこみ
み巾のふとんにまくらを二ツならべて寝もせずまぢあかし
じつと寄り添いなんにもいはずふたりして見る写真の糸
糸がほ作つて寄添見てもかねをくれねばつらくひ(六才)
ひとにいふなとかむろの口へ一寸ふたするさつまいも
もとは相応に金有松も絞りとられて不仕あわせ
せなか合せの素根寝もいつかとけてうれしいはら合す
すへは夫婦と願ひしことも叶ふて嬉しいそへる京(六ウ)
追加
いと始にならひしものをせすと心のとめどころ
不見廻家可越? 述
(以下省略)

明治十五年一月十日御届

明治十五年一月十日出版

編輯兼出版人

愛知県土族

伊藤兼道

尾張国名古屋区前塚町七十五番地

売弘所

名古屋下新地若松町

塚崎藤八

同本町通七丁目

百架堂吉三郎

同南呉服町

新聞売新助

製本所

同日置手代町
団扇屋衆静堂(奥付)

二十七『いろは尻とり』即席浮世都々一

(明治十六年刊。菊池所蔵。同じものが国会図書館・東京都立中央図書館特別文庫東京誌料にあり)

本書は、文化庁長官裁定のもと、「近代デジタルライブラリー」において公開されている。

「いろは尻取」即席浮世都々一(表紙)

「いろは尻とり」即席浮世都々一序(序題)

「序文省略」
いろは尻とり 即席浮世都々一(内題)

いろは尻とてまるめた世界いけんするやつは気がしれぬ
論の出ぬよふに証券印紙はつて起証をとりかはし(十四才)

花の小てふはしほらしけれどもとはけむしのばけたもの
西のさじきと東のさじきあばたをかくした遠見あひ
ほれたほの字はひの字にまの字ひまにあかしてときおとし
返事しだいでわたしもむねをすゑの思あんをせにやならぬ(十

四才)

としやよつても此みちばかりせがれは倅にまけはせぬ
千筋の縄にてしばつたよりもとくにとかれぬ義理のなわ
りんきするより紅かねつけてほかにいゝひと見つけよふ
ぬらりくらりと出た鯨をばねがおさへた日やう日(十五才)

る浪させたるもとはといへばみんなわたしと目になみだ
おまへゆへならわしや命でもといふてはもおまへもとりやせま

わがしが生れは神田ときいて戸籍しらべりや越後もの
かはいかはいが度かさなりてこのごろおなかゞふくれつら(十

五才)

よせばよかつたあいつのおかげのむもうるさぬさんきらい
たよりすくないわたしの中から相談するのはぬしばかり
れんじ開いて身につまされてはなして遣つたるかごの鳥

そふかそふかとまじめにうけてのせたつもりでのせられる(十

六才)

つんとしてせなかそむけてすました顔もこそぐりやふきだす脇
のした

ねんが明たらおまへの妻とあちらこちらへくちをかけ
なんといふたらおまへのむねがとけて逢やら三重の帯
楽に見へてもあの水鳥もあしにひまなきながれの身(十六才)

むねに物ありとはしらすうつかりのつたるくちぐるま
うぬもつらいもおまへのためと二度のつとめのひきまゆげ
いへばつんつんだまつて居ればのほうずもないあさねぼう

のむならおのみよわたしものむよ人間一升五十ねん(十七才)

おつにひねつて利くつをいへばこつちもひねつてのむたばこ
くされえんやら毎日けんくわ近所もあきれてとめにこず

やけで呑酒うまくもなかるそれより下駄でも買ておくれ
待宵にじれつたいぞへあの月の雲晴ておかほを見せなんし(十

七才)

けしやうかゞみにやつれた顔を見るもやつぱり癩のたね
夫婦なかく能子も出来て出雲のかみにもおよろこび

こけのしんかねをばためとふともらつた恋女房
えてに帆かけてすゝめた米の相場がさがつてもつづれ(十

八才)

てんのたすけかけぶ此ごろは女にほれられかねもでき
あさなゆふなにおまへのかほを見てもやつぱりあばたづら

さきがさきならこつちもこつちほれつくらまけはせぬ
起証せしを活字にすらせ証券印紙もはつてやり(十八才)

ゆやで見たらばおつかあのをうでにちやんの名まへがほつてある
目さきへちらちら道中すがた帳づらあはぬも無理はない
見たりきいたりかむるも嘘を月夜がらすと言まはし

初手は浮気で手くだとてくだそれがこぶじてじつとなる(十

九才)

茶丸并画
都々いつの(十九才)

いまのもんくはこゝろいきそこらにお氣のつかれやせんか(二十

才)

えんやらうんやらみなそれぞれに恋のおも荷でくるふする
ひる日中なんのこどだと笑ふた声の跡は無言でねだのおと
もひよくにぬはせた羽おり一寸着て見てくんなんし

せ背中あはせも口ぜつのはじめいつの間にはらはらあはせ(二

十才)

すいたおかたとこゝろでほめて人に聞かれりやあんなやつ

京 けふから目出度晴ての夫婦眉毛すらせて御新造「(二十一才)

<中略>

又々いろは付都々一

い 言ふも恥かしいはぬもつらし先から何とかいへばよい
廊下ばたばたきやつ来たわへとおもへばとなりへつまらぬへ」
(三十六才)

は したないとはいしてはいれどやきもちややかずにあられない
にしも東もしらなぬわたしたよりにおもふはぬしばかり
ほれたよわみにつひつけこまれむりとはしりつゝとる気げん
別品ぞろひの道中すがた見れば目のどく目のくすり」(三十七
才)

と 一りのまちからくるわへまはりくまでのおかめに引かゝり
一寸一筆まいらせ候とまさか代書もたのまれぬ
りんきするの女は常とすこしの事までやくやつさ
ぬしの来ぬ日は写真を出して見てはいつてもなぶられる」(三
十七才)

る むは友をとたとへのとほりさつをなくす友会社
親のやくめでござとはいへど無分別でも出さにやよい
悪いとしりつゝつひうかうかと渡りそめたよ恋のはし
かんにんしなましわたしがわるひむりどめしたゆゑこのしま
つ」(三十八才)

よ その女へやさしくせじをいふのがおまへの玉にきづ
だんまりの忍びすがたでおさんと旦那けどつて女房がつらあか
れんじでひきあけあなたの空を見ては思はずそでぬらす
そぶかそんならそふしておけと馬鹿がおゝやうか気がしれぬ」
(三十八才)

つ つまる所は手前のためといやな小言もおやのやく
ねづみ衣の出家の身さへはなのいろ香はすてられぬ
なまづが来たとてどふいふわけかねがちうちうねづみなき
ら 蘭のかほりのうつりし小そでそつとそのまゝそでだゝみ」(三
十九才)

む むりとはおもはぬおまへの異見とはいへどふでもわすられぬ
う きなたゝせた新聞記者を恨むどころかわしやつれし
の むきな世帯をくる板塀で困つておいても梅かほる
軒のしのぶにすゝしさ見えてうちやゆかしきあと簾」(三十九

ウ)

おぢやちゞみに見へすく雪のはだに小意気なうで守り
くりからほつてもすなほな氣質女のほれるは無理はない
やつかいもつかい此恋衣こんなにあらしちや干あがらぬ
眉毛おさへてなすびの皮で一寸おはぐる見ておくれ」(四十才)

ま けどられまいぞと目がほでしらせしらをきるほどなほしれる
夫婦のなかにも名はさままようちのをやど六やまの神
恋のちかひは苦界のせかい浅いはむねのうち
縁をむすぶの出雲の神へ亭主にうはきの出ぬよふに」(四十才)

こ てれんの蒸気にてくたの器械ふしぎになくなるかどやしき
あゝいやこふだとりくつをつけてやきもちやくにもゆきとゞく
五月雨のかはくまもなき此物思ひやつれたすがたをみづかゞみ
君にあふ夜はうれしの森の月のくまさへたのもしき」(四十一
才)

ゆ ゆめに見てさへうれしいものをまして今宵のこのおゝせ
目さきへちらちらおまへの顔がわすれたふとてもわすられぬ
見えをしたのもそりや初手のうち内証あかして深いなか
自分のむかしをかんがへ見ればいまのわかいものはおとなし
い」(四十一才)

ひ ゑだに付たる此たんざくも花によそへしこひのうた
人のせんきをづゝうにやまざ新聞記者にはならさまい
もしほやく海土も恋路に皆やつれがみむねにたつ火かくるけぶ
せじでほめればまうけにうけて自分できめたるいろおとこ」(四
十二才)

り 隅田の堤もいまはなざかりけふか飛鳥もひとのやま
す 京と田舎と名はかはれどもかはりやないぞへ恋のみち」(四十
四才)

<以下省略>

明治十六年四月十日御届

同 年同月出版

定価拾八銭

編述兼出版人 東京府平民

山崎勝太郎

深川区御船蔵前町三十二番地

発兌人 本所区横網町一丁目五番地

二十八 『いろはしり取よし』

(明治十九年刊。国会図書館蔵『俗謡絵本』所収)
本書は、文化庁長官裁定のもと、「近代デジタルライブラリー」

いろはしり取よしこの(表紙)
廊のちまかすとあかした外にわたしの誠がなんのあろ
い下づたいの忍びの恋路人にしられたまゝのかは(一オ)
咄しもさせず泣けた計り夜明の鳥でもあるよふに
にくやかからずでモウきぬぎぬとじつと引よせ顔とかほ(一ウ)
ほんにおまへは焼もち深い覚のないこといひならべ
へんな噂をわしや聞たびにおもひすくしてぬしのこと(二オ)
とほざかるのはすへ咲花よしんぼさんせやちのうち
ちはがこうじて背中とせなかな明のからすがなかなをり(二ウ)
りんきせまいとたしなみながらなせに心がやすまらぬ
ぬしの声かとまただまされて出てはみんなにわらはれる(三)
るすをめぐけて来るどら猫もすこしはきがねをするものを
をもひ思はれかうなるからは義理もせけんもまゝのかわ(三)
わたりしやこれほど思ふてにそうも邪見にする物か
かみやほとけに願ひをかけてけふのごげんの嬉しさよ(四オ)
よいにしのばせ漸々の事で逢てかへしてほつとした
たとへ野のすへ山奥までも手にてをひかれて二人づれ(四ウ)
れいの野暮めが又しげしげとうるさいことだよどうしやうぞ
そふた夢見りやゆりおこされて覚てくやしいはらのたつ(五)
つきにむら雲花にはあらしぬしにあふよの明のかね
ねてもさめてもおまへのことをおもわぬ日とてはないわいな
(五ウ)
ならない別れてついそれなりに一人寝るよの仇まくら
らくなお客とねさしておいてぬしと隠れて酒をのむ(六オ)
むねにしあんは定めてあれどぐちがこうじて物おもつ

うはきなおまへにしみじみほれてわたしや鮑のかたおもぬ(六)
のみに勤のわたしじやとても斯もうたがふものかいの
のやまこへてもおまへとふたりくらそと思ふてゐるものを(七)
おもひつめたが二人のいんぐわまゝにならねば連れてゆく
くるかくるかとまつ身のつらさ逢ば別れのまたつらや(七ウ)
やがてふうふといふてはいれどむねのけむりが浅間やま
まゝにならぬがうき世といへどあまりしんきで茶わんざけ(八)
けさもけさとておまへのうわさあんじすこしてものおもふ
ふかくなるほどおもひがますよはやく行たやぬしのとこ(八)
こいしこいしと思ふてゐるに夢じやないかやぬしのこえ
えんのつなかや便りがありてぬしの所へ文のつて(九オ)
ていしゆきどりのぬしより外にうはきどころか何のまあ
あいのおさへとのむさけよりも二人寝ざけがおもしろさ(九)
さいた桜も乱れりやちるよしんぼさんせよちらぬさき
きづよいおかたとうらみつなきつおつる涙は袖のつゆ(十オ)
ゆふべ逢たにまた顔見たく文におもひをふうじこめ
めがほしのんでうきなをたてまよふ二人が恋のやみ(十ウ)
みなどにおろしたかりの舟をつれ出すおまへがあさあらし
忍び逢ふ夜は短ふてならぬにくや夜明のかねのこゑ(十一オ)
ゑきもない事さきぐりをしてぬしをあんじて物おもひ
ひとめ忍ぶははじめのうちよ今じゃ人目も世の義理も(十一)
もめた其夜は腹立まぎれすねづとこちらをむかしやんせ
背中合せてけんくわもすれどこちらむいたら明がらす(十二)
すへのやくそくながながしくもいまにかいあるきのふけふ
けふは目出たく妹背をまなびかわりやしやんすなかはるまい
(十二ウ)
(以下省略)
明治十九年十一月廿四日
編輯兼出版人

愛知県下平民
鍋野長三郎
名古屋八百屋町壹丁目百三番邸（奥付）

二十九 『いろはしりとり都々逸』

（明治二十一年刊。国会図書館蔵）
本書は、文化庁長官裁定により「近代デジタルライブラリー」で公開されている。

いろは都々逸しりとり（表紙）
こゝろいきいろはしりとりとゞ逸ぶし
いろといふじを学校でおぼへ今じやたがいこいのいろ（七オ）
ろふじんこどもはあぶないみやこ馬車人力くるまのは
はだしまいりはをろかなことよどふぞおまへとそふよふに（七ウ）
につぼん人でも英語をおぼへ今じや横文字しつたかほ
ほどのよいのについほれこんでけふもふたりで一ツなべ（二オ）
へいたいさんこそ御国の人よ実地ゑんしう玉のをと（二ウ）
とそのきげんではいへてみればこれは失敬よそのうち（三オ）
ちよとおまちとそで引をさへなげかをまへはうるさがり
りんきしつとゞゆうならをいゝいわなきやわたしのみがたゝぬ（三ウ）
ぬしのくるよはなをさらさびしこひゆへなにかにくるうする
るすいするみのわたしじやものをおそいかへりてまたくるを（四オ）
をいらんになつてあげやへそとはちもんにじこれもくがいのひとく
るわ（四ウ）
わたしばかりに情たてさせておまへわうわきですむものか（五オ）
かんどうさせたは私しがわるい今にもふうふになりすよ（五ウ）
よめにゆくのはわたしはいやよぬしがあるゆへやめにした（六オ）
たんのふするほどおまへとねたいけふものろけてでるよだれ
れんじまごからのぞいて見ればゆうべのはなしはみんなうそ（六ウ）
そをかへうれしい芝居のるすはこんだの日曜きつとまつ
つめりつねられなかいふうふ日のくれるのをまつておね（七オ）
ねんがとゞいて泥水はなれわたしや一人でいるわいな（七ウ）

なじみのふみさへ書ては持たぬおやのばちかやあきめくら（八オ）
らせうもんより三十日がこわい金札のないのでみをくやむ（八ウ）
むかしは鼠をとつたるねこが今じや鯨とゆくはつう（九オ）
うらんでおくれな夜の鐘わわたしはねむたいうらめしめ
ぬちとがまんてとふした中は死んでもわたしはたりなるの（九ウ）
のびる春の日大師へ参り大森土産の梅びしお
おくのざしきでおもしろそふにきやくはすもふのあのじんく（十オ）
くろふするのはおまへのゆへさらくでもラシヤノンわわたしやい
や（十ウ）
やさしくされてもほかへはゆかぬちやけんおまへのわたしやつ
ま（十一オ）
まつみならこそこのたゞみざんぬしがこぬよりどふせやけ（十一ウ）
けさのさむさにかへされましよかゆきのやまやのこのとうふ（十二オ）
ふみはやつても返事はこないいづれだんなはふところ（十二ウ）
ことしも試験はきうだいしたとふみをしたゞめ国元え（十三オ）
えんはいなものあじなものおたふくづらでもいろはえて（十三ウ）
てれんでくたてよばれた客も今じやふうふだナアかゝあ（十四オ）
あめのふるよもかぜのよもかよいくるわでさしたかさ
さだめなきよにさだまるゑんは出雲へゆくのもあとやさき（十四ウ）
きまゝそだちのやぶうぐいすもかごをはなれてぬれるつゆ
ゆめに見てさへよいふじびたいとけてねたよのみなめざめ（十五オ）
めかしたてゞも白歯のまゞでくろふするのふかいつみ（十五ウ）
みゞずのよふなるお文をかいて客をつるからをみなんし（十六オ）
じんすけおんなははなつまみじつにいでいしゆもこまるぞゑ
ゑもんつくろいよふすをさぐりかつておくれとねだるおび（十六ウ）
ひとかどのよふにやこぶがまゞよ私しのすいたは甘藷さつまいも
もと木にまさるうら木はないとまたも花さき灰をみせ（十七オ）
せけんしらすといわんすけれどうちばにわたしでぬしはるす（十七ウ）
すまの浦辺で潮くむあまもやがてむかひでのぼる京（十八オ）

京都大坂東京の地でも芝居びみきとお客いゝ
明治廿一年二月一日印刷
全 月八日出版
日本橋区吉川町五番地
著作印刷兼発行者 堤吉兵衛「(十八ウ)」

三十『新板どゝ逸』

(明治二十一年刊。国会図書館蔵)
本書は、文化庁長官裁定により、「近代デジタルライブラリー」で
公開されている。
新板どゝ逸「(表紙)」

色のいの字に能似た姿二人でふざけて居るところ
論より証拠にや少しの事を直にからんで切れ詞
はれて夫婦に成れぬならば私死にたい諸共に
睨める目にさへ愛敬もつて怖さわするゝぬしの顔「(八)」
へん辞するさへ人目が有ば目顔で知せたい新ぶんへ
とうから妾はおきひ程が邪魔に成らずに身の便利
智恵の袋はおほきひ程が邪魔に成らずに身の便利
立派にやるならお金の音がお呉れ起証誓紙は私や入ぬ
ぬしを待日にや車の音がする度それかと飛で出る
留守にト一をそと引き入れてきつたよ二布の忍緒
押せども引ども動かぬぬしは泥へはまがつた車の輪
われと我氣で求めた苦勞今さらうらみが言れうか
かどの往来の途断ぬうち忍んで入られぬ宵月夜「(九)」
よしあし言なら言はせて置な頓で奇麗に返すあだ
たのむ牛乳玉子も利はずわたりや腎虚で身の疲つた
れいの是さと母指を出され天窓かきかき解たなぞ
そつと掛鉄はづしておいて細目に戸を明主をまつ
積るはなしは一割ほども済ぬとおもふにあけの鐘
ねこと言はれて腹たつならば鯨とるの止にしな
何程流行におくれぬ気でも厭だよ肺病税コレラ
らくに成たと澄しはすれどこゝろ掛りのする地震

むねの算ばん「(いすか)」のはしよ免と言ふ字を着た鱧ぜう
嬉しい返事を端書でよこし配達さんには恥かしみ「(十)」
のせて世渡る妾の船へさしておくれよ水馴さを
おこり散して飲むやけ酒が沸立て居たので舌を焼
火事にかみなり地震に暴風雨何だか此秋滅茶苦茶
やめて仕舞ば遣つた金銭が惜く成たよ今日のいま
またの逢瀬の何のと言て猫がそるそる抜くはなげ
怪我をせぬようひぢ鉄砲で惚るをんなを打はらう
こひの暗路についふみ迷ひ行ほど消るよ身の栄え
えんは異なもの妾しがフツと主に惚たは何をあて「(十一)」
てんから夫婦と極たる二人今さら世間が何のま
あめも降ぬに真白な鬼はひとに背負せて帰すか
さきが先なら妾しぢやとても角に出やせぬ窓の月
きみよ近ごろ失敬ながら水性はわるいとす説ゆ
ゆきののはだも今朝吹風にとけて莞爾ねらふうめ
めに立疲れと縋つた肩に思はず二人で見ると同し
みえや飾りがなにある物か心から惚合ふ好た同し
死んで地獄へ形見に持て妾しや行ぞへ写真の糸
糸んきり榎を根こぎにもつて惚た奴等を打ばらひ
非も理も聞ず踏だり蹴たり何ぼしが無身邪逆も「(十二)」
もてないお客と人力ひきは帰る帰ると言ふがくせ
せかれて逢ねば見る夢にまで主の浮気の根を正す
すいた同志で世帯を持つて此様な嬉しい事はない「(十三)」

明治廿一年七月卅日印刷
同 年八月一日出版
編纂兼発行者 中西惣次郎
浅草区八幡町四番地
印刷者 宮本敦
京橋区銀座式丁目拾貳番地
発兌元 大川屋錠吉
浅草区三好町七番地「(奥付)」

三十一 『明治新選』 都々逸粹の近道

(明治二十二年。菊池所蔵。国会図書館にもあり)

本書は、文化庁長官裁定により「近代デジタルライブラリー」で公開されている。

滑稽三世相 五九道士閱

「明治新選」都々逸粹の近道

浅見鉦太郎著

文昌堂蔵(表紙)

名古屋名勝八景

「明治大新板」滑稽三世相

都々逸粹の近道(見返し)

都々逸三世相の序

旧習腐と打遣は文明開化を生嚙にしてゐる奴が仕業にて実日本の通

人は古を温て新きを素人玄人おしなべて之に寄らざる物はなし因て

今度撰だ都々逸浮気でない故しんとして須弥るは元より覚悟の前南

千部集の売口よく山ほどつもれと爾云

明治廿二の春 五九道士(一才)

《途中省略》

いろはうかれどといつ

いろはなるみのゆかたもぬいではだじまんとなつての不二

ろんよりせうをとられてないむすぶもふとしたでござる

はかない糸にしとてんからしれてむすぶもふとしたでござる

にしも東もしらないものをつれてうわきなたびかせぎ(十四

ウ)

ほれた女房のあるそのひとにんでこんなほれたらう

へびに女房がなられちやこわいいろはしないとあきらめた

とふからこゝろにほれてはぬれどどふもいひよるしほがない

ちわがつつのつてねもななくぜつはらをたつたりたせたり(

十五才)

りりかうだと思つてかゝるがおまへがばかよそばの二はいもくつ

たやつ

ぬれてあふよはねてからさきのまつにかひなきあけがらす

るすをねらつてどろほぶ猫がきてはちよこちよこぬすみぐひ

を おまへじやきをもみ女房にやきがね是じや命もつゞくまい(十

五ウ)

わたくしも女子じやいひたい事もぬしのためじやとがまんする

かわゆがりじついつくしてわたしのかほをふみつけられてはら

がたつ よそふと思へどまたかほみればどふもみれんで立かへる

たまにあふゆへはなにしがのこるしみじみだきねがしてみた

(十六才)

れいぎたゞしききやうみんさんもけつくわけなくとりみだし

それほどあのこがかあいならばわたしにみれんはあるまいに

つれてにげるとおまへはいふが女房すてはゆかれぬ

ねるまもないほどおふいそがしや金のかんじようでかたがは

(十六ウ)

なんぼほれてもみすかされてもばかにされてははらがたつ

らんかんさまでもきものはまどふはだかぢや道中もできまいよ

むりなくぜつになかしておいてねるとはあんまりむしがいい

うたゞねのさめてためいきこゝろのもつれ人にやはなせぬこの

しだら(十七才)

あけんするほどなをやけになりかんしやくおこしてやつあたり

のろけてみんなになぶられながらおもはずしらすべ

おにのやうでもこゝろのうちはべんてんさまでもかなやせぬ

くろうするのをはてんからかくごいきなていしゆをもつからは

(十七ウ)

やみとおまへにかういりあげてすゑはどふしやうかうしさき

まはし屏風のたをれたゑんでとなりどうしのおちかづき

けんもぐんしをしやうといふはかねてむほんの下ごゝろ

ふとしたことからついのりがきて今じやかたときわすられぬ(

十八才)

こんななげきもおもへばほんにむすぶのかみがうらめしひ

ゑんがたりやこそたかねのさくらおつて手いけの花にする

てまへがつてのわがまゝいふもなかう人いらすのふうぶなか

あどけないのがかわゆひけれどしよ心すざるもじれつたい(十

八ウ)

三味線まくらの身のふしだらはわがみながらもはづかしい

きがねくろうもみなおまへゆへそれに今更きれことば

ゆかしごげんとたゞひと筆につなぎとめたる初会文(十九才)

めつきでしらせとせとれといへどさつてあながらしらぬかほ

みれんらしいがたゞひとことをいつてやりたいことがある

し しみじみとあへぬつらさのつくかんしやくよかうもじれたくな
るものか(十九ウ)

糸 糸んきり糸の木でさかうとしてもほれたどうしにきゝせぬ
ひ 人にやいろかといはれてあれどぎりをかゝぬがたのもししい
も とをたゞせば他人とた人あらひだてすりやぬしのはぢ(二
十才)

せ せなかそむけていひたひこともがまんして寝るそのつらさ
す すみをつぎつぎ火箸をふであつ男のかしら文字
京 きやうに田舎もあるゆへわたし見たような女もぬしのつま
都々一終(二十ウ)

明治廿二年三月十日印刷
同年同月十五日出版

定價拾銭
版權所有
著作兼発行者 愛知県名古屋区門前町七十四番戸
浅見鉦太郎

印刷者 愛知県名古屋区新柳町八十二番戸
吉田鏡輔

売捌所 同門前町三丁目
文昌堂

画工 同県同区住吉町
今江春近(裏見返し)

三十二 『東都々逸五百題』

(明治二十二年。草廬舎蝴蝶編。活版本。菊池所蔵。国会図書館に
もあり)

本書は、文化庁長官裁定により「近代デジタルライブラリー」で
公開されている。

いろは尻取都々一
如何なるお医者も解剖(ふわけ)は出来ぬ色と欲との有どころ
論より証拠だ是マア御覧羽織と衣服(きもの)に侵染(しみ)とし

は 葉唄文句の口説ぢやないが帰りやしんすか此雪に(十三頁)
二世とちぎりし写真をながめ思ひ出しては片ゑくぼ

反古にしやんすな妾の苦勞みんな誰故おまへゆへ
返事するさへ猶はづかしくモシと呼のは猶のこと
床の番する振れた客はみんな出雲の神のばち
千歳までもと契りしものを今更切るたそれは無理
情氣で妾は云ふではないが主の浮気なげ止まぬ
主と二人でいま此の苦勞寝物がたりのこともある
るの字の頭へこの字とがの字附てくたくよ此胸を
をそい帰りを待つゝじれて思はず引さく水うちわ
わけも云はずにたゞ口小言愛想づかしかじれるのか(十四頁)
かすかずうらみは積つて居れど主の話しの後にしよ
よせと云はれりやまた猶更に折て見たいよ花の枝
たまさか逢たに短い夏の夜あけに悲しきあさわかれ
れこがないうへ見初たけれど承知しながら腹が立つ
そしらぬ素振は人前ゆへと承知しながら腹が立つ
つなぎどころのない身のつらさホんに私はすて小舟
寝ても覚ても苦勞の夜中悪や戸たゞく那(あ)の水鶏
何から先云ふて宜やら二人しばし莞爾にら目くら
らくな務めぢやないとは知ど主の為なら厭やせむ
むりや邪見も苦勞だけれど可愛がられりや又苦勞(十五頁)
うしる姿は確にそれと思へどまさか呼悪ぬ
ぬまも今とて貴君のうはさなどゝ取なす喰せもの
飲ならお待よ爛してあげる夜更ぢやお止よ冷酒を
おしき筆止めまづあらあらと用事許りに候かしく
くもる月影辻占わるく思ひむすべる胸のあや
やさしい氣立にツイうかうかと迷心のくるひごま
まさか夫とも云ひ出しかね一寸とつなぎの茶碗酒
げいしや娼妓の家業と主はまこと三分にうそ七分
ふるい文句の氣証を書もたがいに浮気をせぬ証拠
こゝろい焦れてやうやう逢ば儘にならない人のまへ(十六頁)
えらひえらひと無暗(むやみ)に褒て人をおだてる主のゑて
手管と知りつゝツイ欺されて何(どう)すりや宜(よか)らふ是は
まめ
あの時あアして是からしたも今ぢや互に笑ひぐさ
さへたやうでも又すぐ曇る心ほそさの秋のつき
きれない姿も特みにやならぬ溢(こぼ)れ易いよ花のつゆ
夢はさかゆめ当にはならぬト八云へ氣になる今の夢

めを出しや剪取り花咲アはさむホン二不実な花挟(はなばさみ)
身には覚への無いではないが余計な世話だよ新聞紙
しつかり固めの比翼の紋も末は合ふとの三つども糸
糸んを繋ぎの屏風の中は切にきれない蝶つがひ(十七頁)
ひとりくよくよ案じて待ば永く思ふよ夏の夜も
もしや夫かと戸を開け見れば悪い辻占秋のかぜ
せけば急ほどアレ憎らしい人をぢらすよほとぎす
すいた同志で夫婦になつて意気な処に暮したい
色のいの字に能く似た姿二人ふざけて居るところ
論より証拠は少しの事も直に何だつとめことば
鼻を合せて口をも合せ臍をあはせた後はなに
にらめる目にさへ愛敬以て怖さ忘るゝ主のかほ
惚たほれぬの其源は粹な鶺鴒が来て教へ(十八頁)
返事するさへ人目があれば目顔で知らせる格子外
疾(とう)から私は寝返りなれど切るはお金を取たのち
智恵の袋は大いほどが邪魔にならずに身の便利
立派に遣るならお金をお呉れ起証誓紙は私や入らぬ
主を待つ日は車の音がする度其かと飛で出る
留守にト一を密(そ)と引入れて切たよゆもじの忍緒(しのびのを)
押ども引ども動ぬ主ははまつた車の輪
妾やおまへに任せた身体(からだ)ぎりも世間も入るものか
門に人目の途ざれぬ内は忍んで這入れぬ宵月夜
算(よま)れた鼻毛で貸たる紙幣(ぺら)が身代かぎりになつて来
た(十九頁)
頼む牛乳玉子もきかず妾も腎虚で身がやつれ
れんぼ為るのを明して云へば白痴でもお金がある故ぞ
密(そつ)と鍵金外しておいて細目に戸を明け主をまつ
積る話しは一割ほども済ぬと思ふに明のかね
猫と云はれて腹立つならば鯨取るのを止(やめ)にしな
何ぼ流行に後れぬ気でも厭だよ肺病税コレラ
楽になつたと澄して見ても心憎いは此の地震
胸の算ばん(いすか)の嘴よ免といふ字を着た鱧(どぜう)
移る尻取り都々逸いろは案じて自分でコリヤ旨(うま)い
異見聞ほど猶更つもの我が身ながらも因果者(二十頁)
乗て世渡る妾の船へ棹(さし)ておくれよ水馴さを
怒り散して飲む焼酒が煮立て居たので舌を焼く

火事に雷地震に雪に此の春ア何だか滅茶苦茶
山ほど積りし思ひのたけを雪の朝の向ひ酒
儘になるなら紙幣を造り廃業届けがして見たい
今朝も今朝とお部屋の小言寝言とお尻を気をつける
二つない気で迷ふたものを心知らずの水の月
心と心と心と心合ふて心が増すころ
襟につくのも桜の一つ積る心はぬしのため
手鍋下よと口では云へど実は乗たい玉の輿(二十一頁)
逢ふ夜途絶へて肌寒くとも妾や重ぬ小夜衣
酒は醒るし娼妓(きやつ)ア往たぎり生憎煙草の粉もない
切るなんぞとアレ無理ばかり手出したのは主が先
油断しやんすな箱入じや逆堅い名計石炭油
雌(めんどり)が時を啼(つく)つて雄鳥(おんどり)啼(なか)
ば私や主故泣明す
水に縁ある彼屋根船も人に漕れる浮気性
静に成(なさい)な那(あ)のお查公(まはり)に聞れちや宜無(よ
くない)痴話喧嘩
縁はいな物彼(あの)別品は主に惚たは何があて
低い花嫁見て婿さんは吉野山より高く誉(ほめ)
若工貴君(あなた)と背中を叩襟のゴールは最(もう)何時(二
十二頁)
娼妓渡世と玉ころがしは穴を見当に客が来る
炭に譬へりやお前は堅木をこりや妾もあつくなる
いつかほころぶ蕾の花の顔にほんのり桜いろ
論はないぞへ察しなさんせ主ゆへ今日びの此白歯
恥かしいとて云ずに居ればエ、もじれつたいお互に
悪い秋風まよひの論はあなめあなめのすゝきのほ
惚た中でも我慢は出来ぬ今日を限りの運のすへ
へんな事からツイ遠ざかり知らぬ顔とはつみな人
としま盛りに白歯で浮れ苦勞するの親のばち(二十三頁)
血(ち)ゑん近づき皆な借倒し心いら此の不義理
怪気らしいが言ずに居れば未か如何(どう)やら覚束ぬ
主に二日も逢ずに居れば風邪のくしやみも気にかゝる
類が共とて那(あ)の子と君は桃と桜の顔とかほ
思ひ廻せば此身の泣も廻る因果のくるまの輪
態(わざ)とけなして又或時は胸で褒合ふ深ひなか

香りゆかしき蕾の梅もやがて開けば散る浮世
 よし悪は定めがたいが何処から見もホソに程よき那のお方
 他人構(がま)しいお前の仕打心置なくしておくれ
 例の癩癩モ(是)ぎりと云ふは出鱈目みんな虚(うそ) (二十四頁)
 添て二人が暮せぬならば死であの世で家を持つ
 つらい勤めの浮川竹を出ればしうとに又気がね
 念がとゞいて手活となれば朝晩楽しむ床の花
 情け知らずの待身を知らで今日も来とは何ぢややら
 楽なやうでも多の客の機嫌取る身は気が痛む
 無理な義理づめ無体な身受ホソに困つた此苦勞
 虚か誠かサツパリ知れぬ先でも知れまい我底意
 異見しやんすな妾の気性知つてするとは不実者
 飲でお前はくだ巻ならば捨てしまをう此の酒を
 鴛鴦と人に云はれた二人が中をヒヨソな事から一人泣く (二十五頁)
 口惜い思ひも男の不実ホソにもつれた胸のあや
 八釜しい世間知らずか岡焼もちか何の益なき人の邪魔
 待ど来ぬ夜はツイ癩しやくで毒と知りつゝ茶碗酒
 今朝の別れは何時よりツイ何故かジレツタイ昨日今日
 ふくさゝばきに手加減覚へ惚た心を茶道ばこ
 心がらとはソリヤ情ない苦勞するのはお前ゆへ
 遠慮するのは始めの中よ何時か心もうち開て
 テンに嫌なら何故爾(こ)うなつた今更嫌(いや)とはホソニまア
 厭(あき)も厭(あか)れもせぬ其中を義理で別れる其つらさ
 サツパリ切たとは人には云へど影ぢや未練の忍び泣 (二十六頁)
 聞て北野の梅とはおるか偕も見事な花の眉
 昨夜(ゆうべ)の移香まださめぬのに又も嬉しき今朝の夢
 女波(なみ)さしき小磯の浜へじれて打込む仇男波
 身から出た錆つき離されて今は野中のやぶからし
 しみじみとツイ勤の辛抱するも心がらだかお前ゆへ
 縁と時節を待とも知らず先は平気で片思ひ
 久しいものだが虫づが走る買てお呉よさつまいも
 若しヒヨツト変りやせぬかと案じて居れど態と知らしうたぐらせ
 世帯かためて氣質になつて酒も飲ねば色もせず (二十七頁)
 吸つけ煙草にツイ浮されて人の意見で此目まい

やくおのあうむなねつそれたよかわをるぬりちとへほにはろい

家を出る時や別れて出て郵便囊で逢ふ手紙
 論よりや負るがコレマア御覽証拠は羽織に紅の色
 腹も立まいよと背中を叩き莞爾笑ふてのぞく顔 (四十八)
 憎らし土はこゝろも空にのぼり詰たる軽気球
 惚れた同士はこゝろも空にのぼり詰たる軽気球
 返事するさへ猶ほ口籠る況てモシとは呼びにく
 とけぬ紛れに切ては見たが後ぢや矢張りつなく糸
 一寸途中で降こめられたが腰をかけたが縁の端
 愠気で私しは云ふのぢやないが浮気するにも程がある
 主の浮気を主にも云ははずト云つて人にも云ぬ義理
 流浪するの今更思やみん自分の心から
 折つて見たりと心の中で思や主あるの心から
 私り支度のかアレ洋犬までが下駄をくわへて留る足
 歸りに巢籠る主とは知らず待夜は長い雁のふみ
 他所にやお早くお帰りなごゝ悋氣離れて粹異見
 偶にや無いゆゑ見切たけれど悋氣離れて粹異見
 レコが無いゆゑ見切たけれど悋氣離れて粹異見
 夫と云はねどさゝれた猪口に浮ぶ情を汲み交す
 露と尾花とそいさかひの纏れ吹き解く朝あらし
 鳴ても暮すも素より承知なりや戸叩くあの水鶏
 鳴りや邪見も苦勞だけ承知なりや二人で共かせぎ
 むりや邪見も苦勞だけ承知なりや二人で共かせぎ
 浮気に跳出し硯の海に身をば投たる粹な蚤
 むつそ断たらし硯の海に身をば投たる粹な蚤
 咽を鳴して最来る頃と云ふは迷はぬ人の事
 己が羽風に鳴子をならし独りで気をもむむら鴉
 来るかと思へば又た行く燕なんで気をもむむら鴉
 山家そだちの山葵も漬りや酸味で泣せる三ばいず

三十三「笑楽」滑稽玉手箱
 (明治二十三年刊。瘦々亭骨皮道人西森武城編。国会図書館蔵)
 西森武城は大正二(一九一三)年に没している。
 「笑楽」滑稽玉手箱(表紙)
 (省略)

ま 迷ふ鳥羽玉恋路のやみを照すランプはなぜ出来ぬ(五十)
けむい仕打の主や巻たばこ呑こむ振して口ばかり
不図した事からコツソリ稲の穂の字に実が入り飯となる
怖いが序幕で嬉しい濡れ場末は目出度夫婦中
榮耀栄花に暮さうよりも二人自由の小なべ立
手広く地面をとつては居るが店借して居る藤の花
逢ふは別れの種とは知れどいつも別れに翻す愚痴
酒も豆腐も自由な廓で聞くは果報か時鳥
切はせぬかと案じる鼻緒調べて揃へる主の下駄
夢の浮世に長らへ居れば五臓病よな事ばかり
芽を出しや剪とり花咲やはさむホンに不実な花剪刀
身に引あてたる絵入の続き余計な苦勞を新聞紙
自烈た紛れに引裂文が破れかぶれの事はじめ
縁を繋ぎの屏風の中は切にきらぬ蝶つがひ(五十一)
ひい世間も束縛されりや啼てあかすよ籠の鳥
もやひ繋ぎし橋間の小船浮た端唄の水調子
せげば堰ほどアレ憎らしや人を待せるほととぎす
す墨に思ひの恋ぢを籠て薫り洩さぬ袋
(以下省略)

明治二十三年十一月六日印刷
同 年十一月十五日出版

版權所有 浅草区御蔵前片町二十番地

著者 西森武城

発行者 京橋区南紺屋町一番地
井上勝五郎

印刷者 浅草区左衛門町一番地
三好守雄(奥付)

三十四 『新版大和魂支那国征伐』 いろは 都々逸

(明治二十八年刊。肥熊山人編。国会図書館蔵)
本書は、文化庁長官裁定により「近代デジタルライブラリー」で

公開されている。
肥熊山人作
『新版大和魂支那国征伐』いろは都々逸
風雲堂(表紙)

いろは都々逸
いつも変らぬ日本の兵士死するを尊ぶ頼もしや
論語作りし孔子の顔に がどろぬる情なや
薄情極るチヤンチヤン坊主軍のお役にたつものか
逃るが名譽か豚尾の国は逃げて李鴻章とほめられる
ほんに憐れな豚尾の頭石原見たよにころころと
平降したなら兵器を収め四百余州を明け渡せ
逆もだめだよ清国政府加勢西洋とは松に虎
力も無ひのに軍は六理だ支那で勝れる訳じやない
李鴻章逆名はよいけれど軍に掛けては馬鹿の馬鹿
盗みする程軍を思やそんな敗軍せまるもの
類ない日本に手向ふより首にのしつけ進上せよ(一)
和睦しよ逆今更をそい降参するならさしてやる
神か仏けか日本の情け さへ六やみにや殺しやせぬ
読んで見なされ此新聞紙北京間近くおしよせた
たまらぬ愉快でなぬ日本の兵士命しらずに進むもの
連戦連捷愉快でなぬ日本の兵士命しらずに進むもの
それ程弱ひと始めに知らば刃物もたずにかゝるもの
つれない各国うらみな公使中裁裁談判取合はぬ
ねても眠らぬ天津北京水鳥の羽音も大和兵
成らぬ金でも出さやきや成らぬ成らぬですむよな事じやない
らつば吹くのと白帯見れば書生らしいじやないかいな
むごい償金殺して置けば後でだせぬけしのむし
嬉しや我兵罷の様だ を殺して居るわいな
いまましいぞへ清国狐狡猾一法で義理知らず
呑めやさわげ北京落城の大捷祝賀しばし待たんせ花見まで(二)

お 御前の云ふのも無理ではないが百億万弗そりや不足
く 国と君とに捧げし命生て帰るの心なし
や 大和魂の剣を磨きチヤンチヤン頭をなでぎりに
ま まで暫し迂活に出来ない講和の談由断するならだまされる
け けたてはね立て荒浪の間に見ゆる軍艦朝日旗

ふ 文も手紙もよめなぬわたし忠君愛国只一つ
こ 虎列刺病より大和の兵は恐ろしいぞへ皆殺し
え 手のない蟹だよ清国政府まゝ成らぬぞへ可愛そに
て 後の難義は露程知らず馬鹿にしたのが身のつまり
あ させて被下百億万で後生だ降参頼み升(三)
き きついで大鳥公使日本広めの発起人
ゆ 夢か現かヤンチャン坊主親玉変るも知らぬのか
め めつたに逃るなヤンチャン よ熊に見れば捕われる
み 見たへか大和の腕なみならば御金出しても見せてやる
し 死するは大和人士の習ひ大筒小筒は蛙の声
糸 遠慮会釈も荒くれ男軍したがる日本兵
ひ ひどい仕打ちだ後而已見せてはねで飛ぶよな豚尾漢
も もしもし さん一生の願軍を後生だしてをくれ
せ 勢揃ひすりや青物塵だ南瓜頭の品評会
す すてゝ置かれぬ今度の軍共にゆるさぬ四千万(四)

明治廿八年三月二十日印刷
明治廿八年三月二十五日発行
熊本県合志郡大津町八百拾九番地土族
当 時
北海道渡島国函館九西川町六番地止宿
編集兼発行者 宮崎伝喜
印刷所 北海道函館区弁天町五十三番地
合資会社 巴港社(奥付)

三十五 『日清戦争いろは都々逸』

(和田庄蔵編 明治二十八年刊 国会図書館蔵)
本書は、文化庁長官裁定により「近代デジタルライブラリー」で
公開されている。
日本大勝利 全(表紙)
秀逸抜擢
日清戦争いろは都々逸
いつでもかつたる今度のいくさひとりで角力をとるやうに

はるでもかぢでも動かぬものは沈められたる運輸船
はらをたつのは向ふのむりよ日本じや今まくでがまんした(一)
にげる矢さきへてつぼううたれ腰がぬけたでにげられぬ
ほらを吹きよせちやんちやん政府木のは天狗の無駄軍議
閉口したなら尻尾をまいて命ごひでもするがよい(二)
とて日本にかたれぬからは早く降参するがよい(三)
ちやんちやんあたまへ両手をかけてぶらんこ運動してみたい
李鴻章でもだれでもおいでどうで歯の立国じやない
ぬしは条?をばきつたるからはどうでも勝手に支那の国
留守か逃たか旅順のたいば鉄砲うちだすものもない(三)
男らしいよ日本の兵は一人もにげたるものもない
わぼくきかぬといふではないがはぢを知るならせめてこい
かつは日本軍艦まけるは支那よ同じ流れの上ながら
よせばよかつたちやんちやんいじめ今じやとりこが邪魔にな
退屈するほど待せておぬて今にでゝこぬ支那の兵
れうけんするから償金だしな近江の湖水のうまるほど
それほど馬鹿とはしらずにいたが朝鮮まで出てはぢをかく
つものうらみのことから枝葉がさいて風におらるゝ芥子の花
ねのないことから山らしくは百年たつてもいくさする(五)
ないしよですむのを仰山らしくはあめうりらしいやないか
らつばふきふきでゝくるさまはあめうりらしいやないか
むごいやうでもころしてしまやあとでねざめがよいわいな(六)
うらみつらみをきく耳やもたぬあやまりやしたといふがよい
ぬながら勝たうとおもふはむりよ威海衛まで出ておいで
野こへ山こへにげてはきたがもはやあるけぬひとあしも
おにのやうでも日本の人はなさけこゝろはあるわいな(七)
くのが広いとて高慢するな兵がよわけりやかたれぬ
山の上から義州のはてへせめておとした支那の兵
まけて逃るはおまへのすきよ勝ておふのはわしがすき
けんつつけでつぼうだてにはもたぬちやんちやん坊主をつつがた
ふるひ恐るゝ清兵隊は日本の兵士にかつものか
こんどばかりか此のちとてもしづめてやるぞへしなのふね
江戸や長崎はなれてとほくいくさに出のも国のため
でだしたの豊島沖よしづんで黄海するがよい(六)

あ あんなやつでもてきかとおもやまさか見捨ちやおかれぬ
さ だめし日本をおそれてゐやうたゞの一度もかたぬわぬ
き 黄色な竜奴もとんぼの赤に眼を白黒に青い息
ゆ だんするなよちやんちやんとても顔に目もあるくちもある」
(10)

め くらへびにおぢぬといふが又も日本にむかふきか
み 見ればみるほどおかしなものはちやんちやんあたまにさげたか
し しまつておいたる鉄砲だしてみがいて来るとは気が長い
ひ 営所営所につめたる人はさぞやさむかるつらかう」(11)
も 人目ばかりはりきんでゐれど実はこわがる日本兵
せ ともめていくさをするではないがさきで引ねばせひがない
す せつ生ながらもころさにやをかぬあとで四の五のいわぬやう
す こそしのうちだとしんぼうしやんせ今にとりまます支那のくに」
(12)

版權所有
明治廿八年四月二日印刷
同 年四月六日發行
編輯兼發行者 東京市京橋区水谷町四番地
和 田 庄 蔵
印刷者 東京市赤坂溜池榎坂町二番地」(奥付)

三十六 『歌曲花園 音曲博士』

(明治二十八年刊。春の屋若葉編。菊池所蔵)
奥付から、春の屋若葉は池村鶴吉と考えられる。同人の著作は、『現行願届書式手続大全』『名流美文大観』の二点が近代デジタルライブラリーで文化庁長官裁定のもと、公開されている。したがって、著作権消滅扱いと考えられる。
春の家わかには編
歌曲花園
音曲博士」(表紙)
いろは尻取都々一
如何なるお医者も解剖は出来ぬ色と欲との有どころ

論より証拠だ是マア御覽羽織と衣服にしみとしは
葉唄文句の口説ぢやないが歸りやしやんすか此雪に
二世とちぎりし写真をながめ思ひ出しては片糸くぼ」(五十八)
反古にしやんすな妾の苦勞みんな誰故おまへゆへ
返事するさへ猶はづかしくモシと呼のは猶のこと
疾から私は寝返りなれど切るお金を取たのち
千歳までもと契りしものを今更切るたそれは無理
悋気で妾は云ふではないが主の浮気はなせ止まぬ
主と二人で今此苦勞寝ものがたりのこともある
るの字の頭へこの字とがの字附てくたくよ此胸を
をそい歸りを待つゝじれて思はず引さく水うちわ
わけも云はずにたゞ口小言愛想づかしかじれるのか
かはずかづうらみは積つて居れど主の話しの後にしよ」(五十九)
よせと云はれりやまた猶更に折て見たいよ花の枝
たまさか逢たに短い夏の夜あけに悲しきあさ別れ
れこがないゆへ見切たけれど振れたお客はさぞや嘸
そしらぬ素振は人前ゆへと承知しながら腹が立つ
つなぎどころのない身のつらさホンニ私はすて小舟
寝ても覚ても苦勞の夜中悪や戸たゞく那の水鶏
何から先云ふて宜やら二人しばし莞爾にら目くら
らくな務めぢやないとは知と主の為なら厭やせむ
むりや邪見も苦勞だけれど可愛がられりや又苦勞
うしろ姿は確にそれと思へどまさかに呼び悪ぬ」(六十)
ぬまも今とて貴君のうはさなどゝ取なす喰せもの
飲ならお待よ爛してあげる夜更ちやお止よ冷酒を
おしき筆止めまづあらあらと用事許りに候かしく
くもる月影辻占わらうか思ひむすべの胸のあや
やさしい気立にツイうかうかと迷心のくるひ駒
まさか夫とも云ひ出かねて一寸とつなぎの茶碗酒
げいしや娼妓の家業と主はまこと三分にうそ七分
ふるい文句の気証を書もたがひに浮気をせぬ証拠
こゝろし焦れてやうやう逢ば儘にならぬ人のまへ
えらひえらひと無暗に褒て人をおだてる主の糸へ
手管と知りつゝツイ欺されて何すりや宜るふ是はまあ
あの時あして是からしたも今ぢや互に笑ひぐさ
さへたやうでも又すぐ曇る心ぼそさの秋のつき

きれいな姿も持みにやならぬ溢れ安いも花の露
夢はさかゆめ当にはならぬト八云へ気になる今の夢
めを出しや剪取り花咲アはさむホンニ不実な花挟
身には覚への無いではないが余計な世話だよ新聞紙
しつかり固めの比翼の紋も末は合ふとの三つども糸
糸んを繋ぎの屏風の中は切にきれない蝶つがひ
ひとりくよくよ案じて待ば永く思ふよ夏の夜も(六十二)
もしや夫かと戸を開け見れば悪い辻占秋のかぜ
せけば急ほどアし憎らしい人をぢらすよほとぎす
すいた同志で夫婦になつて意気な処に暮したい(六十三)

明治二十八年六月二日印刷
明治二十八年六月七日発行
明治二十八年六月廿五日十八版

版權所有
編輯兼発行者 東京市浅草区福井町一丁目一番地
池村鶴吉

印刷者 東京市浅草区左衛門町一番地
田附平次郎

印刷所 東京市浅草区左衛門町一番地
今泉堂

発行所 東京市浅草区福井町一丁目一番地
松陽堂(奥付)

三十七 『歌曲花園 東都々逸五百題』

(明治二十八年刊。夢の家翊てふ編。菊池所蔵)
奥付から、夢の家翊てふは池村鶴吉と考えられる。同人の著作は、『現行願届書式手続大全』『名流美文大観』の二点が近代デジタルライブラリーで文化庁長官裁定のもと、公開されている。したがって、著作権消滅扱いと考えられる。

歌曲花園
東都々逸五百題
夢の家翊てふ編(表紙)
いろは尻取都々一
如何なるお医者も解剖は出来ぬ色と欲との有どころ

論より証拠だ是マア御覧羽織と衣服に侵染としは
葉唄文句の口説ぢやないが帰りやしやんすか此雪に(十三)
二世とちぎりし写真をながめ思ひ出しては片糸くぼ
反古にしやんすな妾の苦勞みんな誰故おまへゆへ
返事するさへ猶はづかしくモシと呼のは猶のこと
床の番する振れた客はみんな出雲の神のばち
千歳までもと契りしものを今更切るたそれは無理
悋気で妾は云ふではないが主の浮気はなぜ止まぬ
主と二人で今此の苦勞寝物がたりのこともある
るの字の頭へこの字とがの字附てくたくよ此胸を
をそい歸りを待つゝじれて思はず引さく水うちわ
わけも云はずにたゞ口小言愛想づかしかじれるのか(十四)
かぜと云はれりやまた積つて居れど主の話しの後にしよ
よせと逢たに短い夏の夜あけに悲しきあさわかれ
たまさか逢たに短い夏の夜あけに悲しきあさわかれ
れこがないゆへ見切たけれど振れたお客はさぞや嘸
そしらぬ素振は人前ゆへと承知しながら腹が立つ
つなぎどころのない身のつらさホンニ私はすて小舟
寝ても覚ても苦勞の夜中悪や戸たゞく那の水鶏
何から先云ふて宜やら二人しばし莞爾にら目くら
らくな務めぢやないとは知ど主の為なら厭やせむ
むりや邪見も苦勞だけども可愛がられりや又苦勞(十五)
うしろ姿は確にそれと思へどまさかに呼び悪ぬ
いまも今とて貴君のうはさなどゝ取なす喰せもの
飲ならお待よ爛してあげる夜更ちやお止よ冷酒を
おしき筆止めまづあらあらと用事許りに候かしく
くもる月影辻占わらる思ひむすべ胸のあや
やさしい気立にツイうかうかと迷心のくるひごま
まさか夫とも云ひ出かね一寸とつなぎの茶碗酒
げいしや娼妓の家業と主はまこと三分にうそ七分
ふるい文句の気証を書もたがひに浮気をせぬ証拠
こひし焦れてやうやう逢ば儘にならぬ人のまへ(十六)
えらひえらひと無暗に褒て人をおだてる主の糸て
手管と知りつゝツイ欺されて何すりや宜らふ是はやめ
あの時あアして是からしたも今ぢや互に笑ひぐさ
さへたやうでも又すぐ曇る心ぼそさの秋のつき

きれいな姿も恃みにやならぬ溢れ易いよ花のつゆ
 夢はさかゆめ当にはならぬト八云へ気になる今の夢
 めを出しや剪取り花咲アはさむホンニ不実な花挟
 身には覚への無いではないが余計な世話だよ新聞紙
 しつかり固めの比翼の紋も末は合ふとの三つども糸
 糸んを繋ぎの屏風の中は切にきれない蝶つがひ(十七)
 ひとりくよくよ案じて待ば永く思ふよ夏の夜も
 もしや夫かと戸を開け見れば悪い辻占秋のかぜ
 せけば急ほどアレ憎らしい人をぢらすよほとぎす
 すいた同志で夫婦になつて意気な処に暮したい(十八)

明治二十八年六月二日印刷
 明治二十八年六月七日発行
 明治卅五年六月廿五日十八版

版權所有
 編輯兼発行者 東京市浅草区福井町一丁目一番地
 池村鶴吉

印刷者 東京市浅草区左衛門町一番地
 田附平次郎

印刷所 東京市浅草区左衛門町一番地
 今泉堂

発行所 東京市浅草区福井町一丁目一番地
 松陽堂(奥付)

三十八 『都々逸の栞』

(明治三十四年。鷺亭金升著)
 鷺亭金升こと長井惣太郎は昭和二十九(一九五四)年に没してい

る。いろは冠乱題

青森左亭道升
 香亭声升
 雨亭雲升

(い)今は苦勞に身をくだくと末は炭団の丸い中
 (ろ)路次を行くのも世間へ気がね表向には成ぬ連
 (は)晴て迎の出れるからは然程留守居も苦に成ぬ
 全香左

(に) 苦い顔するつらさも主へ少や薬にならうかと
 (ほ) 外にたよりの無い此身には筆はせめての力竹
 (へ) へだつ日数に重なる苦勞胸にへだては無逆も
 (と) 猪牙とやらとも読まない身には波打夜半斗
 (ち) 離魂とか云ふ病となつて添て行たい朝もある
 (り) 主は今宵も砧に更てひとり寝ざめの里の夜半
 (ぬ) 類であつまると思へばいつか明て現に後の首尾
 (を) 惜しい夢だと思へばいつか明て現に後の首尾
 (わ) わざと世間へ切ると見る其処が人目を飾太刀
 (か) 書た文句はよめねどうれし届いた郵便がみ
 (よ) 嫁と斗りじや願ひが足らぬ欲にや親とも成心
 (た) たれがきいてもかまはぬ話添ふて隔の無世帯
 (れ) レール見たよに新婚旅行汽車でうれしい差向
 (そ) 添ふて世間へ肩巾までが広い風呂敷配りもの
 (つ) 月に忍んだ二人の影が高いうはさに成た今日
 (ね) 眠かけたる眼もパツチリと明て嬉い首尾の門
 (な) 余波惜さに気もあちこちへ明る戸迄がつかへ勝
 (ら) 樂書してさへつひ筆走る絶ぬ思ひの主の名が
 (む) 無理な願と思へば神の灯迄かぶりを振らしい
 (う) うづむ炭火も笑くぼと見る添て早起した朝は
 (ぬ) 居続けさす気で降のか今朝はいと袂の濡れまさる
 (の) 軒の氷柱の雫に今朝はいと袂の濡れまさる
 (お) 同じ心で見て居る月か昼の便りの文見れば
 (く) 国と郡をへだて居ても据て並ぶるかげの膳
 (や) やくといふのは肴の外に無てうれしい此夕餉
 (ま) 曲る小路の有るかと思や出先聞く眼に立る角
 (け) 今日もたよりの封緘はがき二枚合が身に嬉し
 (ふ) 不足税ほど嬉しい主の文に目方の有るなさけ
 (こ) 恋といふ風身にしみ目の文に目方の有るなさけ
 (え) 得手に帆をあげ今宵は主を泊り嬉しき床の海
 (て) 天秤かついで働らく主に負ぬ積りの針仕ごと
 (あ) 仇に釣れて衣紋の竹の同じ思ひを夜もすがら
 (さ) さげて見るとも嬉しい手桶水も心も踊るやう
 (き) 切てかけたるの願ひも手桶水も心も踊るやう
 (ゆ) 夢の通り路はつきりせぬは矢張迷の闇らしい髪

左(一六七)
 全(一六八)
 全(一六九)

(め) 眼から降り出す涙の雨の晴れて虹とも成吐息 全(一七〇)
 (み) 見せてやりたい今日丸鬚を沢山言われた面当に 左
 (し) 知れぬ出先が気にかゝり船誰が引汐らしい振 全
 (系) 画くこゝろの儘にはならずいつか恨の文と成 雨
 (ひ) ひとり寝る夜はかゞやく様な主の面影眼に映 全
 (も) もれぬ先こそ穴をも厭へ破れかぶれに成た中 全
 (せ) 膳の中にもうれしさ並ぶ木地も揃ひの箸と箸 香
 (す) 住めばすみよし都と違ひ出先の気兼も入ぬ里 雨
 (京) 京の流れの水見て来たい今は番ひのみやこ鳥 筆(一七一)

いろは短歌附会評

互ひに嬉う気も合乗のやつとはなしも着た船 宝山人 恋亭居升
 評「犬もあるけば棒」に当ると云ふもよい辻占
 かなしい別れに袖をば挟む何も知らない格子迄 甘亭魯升
 評「論より証拠」口に言ねど門口でわかる
 墨田のつゝみに船をば繋ぎ二人して見る桜花 品川楼高尾
 評「花より団子」で御坐いませう
 千筋ひいてる電話の線も主にや一筋かける糸 高松春立園(二四四)
 (四) 評「憎まれもの世に」はゞかりも無きたより 高松馬彦
 外へ結ぶの御心なるか祈れどしるしの見ぬ神
 評「骨折損の」草臥儲けにならねばよいが
 うかり声かけ思へばをかし姿見とめた望遠鏡 譽雪召小豊
 評「屁をひつて尻」の譬口走つたが浮名のもと
 浅く見えてもこゝろの底は深く澄でる春の川 中米楼若竹
 評「年寄の冷水」だと悪く言てもすまして居がよし
 笑もお酒もこぼるゝ計愚痴は翻さぬ今日首尾 板見射利升
 評「塵つもつて山」となる話こそ楽しいけれ
 神に茶断をしたのは昔今はたがひにしづい中 於芳喃史
 評「律義者の子沢山」と言れて見たし
 胸につゝんで開かぬうちが花に見染た恋の種 南品亭若尾(二二四)
 (五) 評「ぬす人の昼寝」当のあるところが恐ろしい 首尾粹士
 池の蓮は夜明にひらくわたしや別にふさぐ胸
 評「瑠璃も針も照せば」光る露の間の首尾

苔のむす迄かはらぬ誓ひ堅いこゝろの小れ石 樵亭林升
 評「老ては子にしたがふ」時がたのしみ
 いつか末には嬉うあへる離れ離れの歌かるた 板見射利升
 評「割れなべにとぢ蓋」合せて置けばよし
 逢へば探つて見気のむねを主に却て探らるゝ 松久亭操
 評「かつたいの瘡うらみ」愚痴も出るもの
 烟になるまで手管をしかけうまく妾を釣花火 楽亭娛升
 評「葎のずみから天井」を見せるも程がある
 蘆が角を出さうとまゝよ好た川辺に狂ふ蝶 新橋亭五猿(二四六)
 評「旅は道づれ」むつまじい中
 不実によせたる体にかへて涙に太つた泣黒子 大野屋小秀
 評「良薬は口に苦し」兎角お齒に合ず
 主の心は角ない故に寄ると触るとうごきがち 久留神棒
 評「総領の甚六」でもなからうが
 つきぬはなしに夜を更しつゝ聞て驚く明の鐘 青亭松升
 評「月夜に」油断をしたがあやまり
 苦界の勤も妾や苦にしない主と約束からは 小樽利亭
 評「念には念を入れ」た約束ならばよし
 寒さこらえて待夜の闇にいつか火種も消て行 長崎月人
 評「泣きつらに蜂」お火の毒か
 義理で主をば帰してしまひ独り淋しい闇の月 禿魯平凡(二四七)
 評「楽あれば苦あり」まゝならぬ
 二度と来られぬ此世で早ふ一度添度あの主と 板見射利升
 評「むりが通れば」道理と聞ゆる願ひなり
 植たさくからもまだきが若い主の心が汲かねる 稲本楼しのぶ
 評「嘘から出た誠」廓の花にも実は生るものを
 うたぐる中にも嬉しい思ひ遅なつたの一語が 欣亭吉升
 評「芋の煮たも御存じない」と思つてゐるやら
 是から浮名は千本桜杯といつてもばかされる 志林泉
 評「咽喉もと過れば」熱さを忘れるには困る
 曲りなりにあのおの鉄管はおふも一筋かよふ水 松乃亭操
 評「鬼に鉄棒」破裂は大丈夫
 思あきらめ障子をたてりや憎や影さす人来鳥 蛸殻町美香(二二四)
 (八) 評「くさいものには」蓋をして置け
 仮令郵税上るが主にや三度出す処五たび出す 喜美のや

評「安もの買ひの銭失ひ」では無し
 あらひ波さへやさしく受て心動かぬ沖のいし 無名氏
 評「まけるが勝」下から出るが肝心
 もれた浮名は少しの隙間破れかぶれと成障子 桐の家主
 評「喧嘩過ぎての」棒で入らぬ事入らぬ事
 まつ夜時刻がのびるに付て辛い此身は縮む様 愛亭嬌升
 評「文はやりたし」夫では遅し
 猿の手遊も今ではうれし忌だ其日に引かへて 喋亭喃升
 評「子は三界の」首枷でも罪はなし
 願ひかなふて二人で立るあかい心の朱の鳥居 一目散史「二四九」
 評「得手に帆」をあげるとは目出度
 浅い帽子で忍びの姿深い仔さいの有る出さき 島のや辰龍
 評「亭主の好な」若い帽子は怪しいぞ
 思ひ染たる心の色が言はぬさきから顔へ出る 樵亭林升
 評「天窓かくしても」尻かくされず
 思ふ湊へ届いて見れば波風たてたもいまは夢 無門庵
 評「三遍まはつて」巻苘の味はひは佳かるべし
 なみだ片手に笑顔を見せるつらい勤の影日向 待里庵文一
 評「聞て極楽見て」地獄の責め
 添ふてうれしい日は二三日後は浮気で又苦勞 板見射利升
 評「由断大敵」愷気の火が燃る
 艾キスの光を借ない迄も主は見すく嘘を言ふ 無紋庵「二五〇」
 評「眼の上の瘤」外にあり
 筆「かけない思ひの数を胸に画いて居る辛さ 愛多甘兵衛
 評「身から出た錆」いたし方無し
 道の様子は冊子で知どいまだふみ見ぬ恋の山 高松馬彦
 評「知らぬが仏」出雲の神も知らぬ間が命
 笑顔ならべた二人の傍に立る屏風も蝶つがひ 朝亭鳥升
 評「縁は異なもの」蝶番ひに花の顔とは
 ま「にならぬで幾その苦勞儘に成たら又苦勞 樵亭林升
 評「貧乏ひまなし」なれども楽み其中にあり
 主の着ものを縫たい計り辛さこらへて針仕事 野呂馬山人
 評「門前の小僧」習はぬでも馴て上達
 細る縁を保たせたとさに求めぬ苦勞がつひ太る 上田伊勢桃太「二五一」
 評「背に腹はかへられぬ」胸に手を置き一思案

大事算のはなしが漏て流す浮名にぬらすそで 高松馬彦
 評「粋が身を喰ふ」住居なるべし
 「京の夢大阪の夢」に寄て
 淀の夜船のこがれて斗り幾度伏見に苦勞する 宝山人「二五二」
 明治三十四年八月廿六日印刷
 明治三十四年八月廿九日発行
 定価金貳拾銭
 不許複製
 著者 長井惣太郎
 発行者 大橋新太郎
 印刷社 東京市日本橋区本町三丁目八番地
 印刷所 佐久間衡治
 東京市牛込区市谷加賀町一丁目十二番地
 株式会社秀英社第一工場
 東京市牛込区市谷加賀町一丁目十二番地
 発行元 東京市日本橋区本町三丁目 博文館「奥付」
三十九「袖珍」都々逸集
 「大正五年刊。花の家主著。菊池所蔵」
 「花の家主」の著書「ストライキ節」が、近代デジタルライブラ
 リーで文化庁長官裁定のもと公開されている。したがって、本書も
 著作権消滅同然と考えられる。
 「袖珍」都々逸集 付二上り新内
 流行文庫「表紙」
 新流行都々逸集
 付二上り新内「扉」
 いろは尻取
 論は無いぞへ察しなさんせ主故今日びの此白雪
 葉歌文句の口舌じや無が帰りやしやんす此雪に
 二世と契りし写真を眺め思出しては片笑くほ
 ほんに思へば苦を忘るる苦勞するもお前故
 返事するさへ人目があれば眼顔で報せる格子外「四」

年増盛り白歯で浮れ苦勞するのも親のばち
千歳迄も契りしものを今更切れるは主が無理
主に二日も逢ずに居れば風のくしやみも氣にかゝる
留守は命の洗濯日和ソツと持出す紫檀ざほ
折々詠めちや心でのるけ主と交した此指輪
妾や自分で心が知れぬ何すりや斯なになるものか
薫り床しき蕾の梅も頓て開けば散る浮世
よせと言れにや又猶更に折て覽たいよ花の枝
他人がしまいお前の仕打心置なくしておくれ(45)
例の氣休めモウ聞き飽たお前の言ふのはみんな嘘
素知らぬ素振は人前故と知つて居れ共腹が立つ
積る話しが口舌となつて中直すりや明の鐘
寢ても覺ても苦勞の夜中憎や戸たゝくアノ水鶏
何是マア爾なに疑ぐり深い心の底迄知りながら
樂な様でも多くの人の機嫌取る身は氣がいたむ
無理や邪慳も苦勞だけども可愛がれりや又苦勞
憂もつらいも皆心から求める他国のわび住居
意見も聞かまい斯なる柄は義理も世間も何の其(46)
軒の忍ぶの釣れて居てはじれつたいぞホンにモウ
奥の座敷で弾く新内につまされ思はず涙拭く
口に云れぬ娘の願ひ乳母が結ぶの糸のあや
喧しい世間知らずか岡悋氣か役に立ない人の邪魔
待ど来ぬ夜はツイ疔癩で毒と知つゝ茶碗酒
傾城に誠ないとはソリヤ嘘の皮真ありやこそ嘘も云ふ
古い文句の起請を書くも互に浮氣をせぬ証拠
今宵一夜は曇つて欲しい忍ぶ折戸の月のさえ
枝に搦みしアノ風さへも煽動じや切ぬと得手勝手(47)
転氣に嫌なら何故斯なつた今更嫌とはホンにまあ
飽も飽れもせぬ其中を義理で分れる身のつらさ
さつぱり切た人には云ど蔭ぢや未練の忍び泣
きいて北野の梅とは愚さても見事な花のまゆ
夕べの移り香まだ覚ぬのに又も嬉しき今朝の夢
芽を出や切取り花咲やはさむホンに邪見な花鉄
水をさゝれた氷でさへも今じや思ひを口うつし
染々と辛い勤の辛棒するも心がらだがお前ゆへ
縁をつなぎの屏風の中は切るに切ない蝶つかひ(48)

独りくよくよ案じて待ば永く思ふよ夏の夜も
若や夫かと戸を明け見れば悪い辻占秋の風
狭い心も女の一途斯なりや意氣地を立て通す
好た同士で夫婦になつて粹な処で暮したい
いろは冠り
色の味をばモウ噛わけて思ひ切ます唐がらし
云ばぢれるし言ねば募る何処が異見の仕処やら(49)
廊下伝に人目を忍び互ひにこゝろを奥座しき
露次の細道暗がりまぎれたどる心は恋の暗
花の色香のツイ覺め果て仇な浮名が散のこる
羽織着た儘ツイ転寝の皺が悋氣の種となる
庭の雪間のアノ梅さへも寒苦凌で花が咲く
憎い中にも氣休云ふて誑す氣丈が実らしい
反古にする氣の誓紙じや無が破被れの恋の意地
程の好い言聞せて置て跡は沙汰なき不如歸
隔つ座敷で弾く三味線も君を待つ夜は忍び駒(50)
下手な手前も愛想と出し薄い茶の湯も濃く立つ
鳥が鳴ても若やと出てこぼす葉末の露の玉
燈火の暗く成のは出雲の神か但や苦勞の仕初か
痴話が高じて喧嘩で歸し跡で案じる今朝の雪
散は素より予ての覚悟仇に咲せし花じやもの
悋氣らしいと言んすけれど誰が斯なに愚痴にした
理を非に曲ても女の意氣地添なきや妾の氣が濟
脱だ羽織を行燈に掛けて人目包みし忍びあし
主の実意は嬉いけれど余所へも斯かと氣が揉る(51)
瑠璃や浅黄に咲く朝顔も色は変れど根は一つ
留守居する身の心も知らず連子よりさす月の影
思ひ紛れと爪弾しても葉歌の文句で又ふさぐ
帯も解いで逢ふ身が嬉し添ば何んでもない女房
妾やお前の下着の小褌肌にや着ども蔭のつま
別れに汚した涙の顔を鳥渡直して出る座敷
籠に飼れて啼く虫よりも妾や氣儘の野のほたる
宵は待せて連子の月の更てさし込む胸の癩(52)
寄り定めぬ妾や浮草で何処で花をば咲すやら
便り少い此身の上と知て居ながら憎らしい

たへ嵐がよしあるとて他へ香るな庭の梅
 連子明ては待乳の山に心がらすのなくばかり
 礼は言ふし話もしたし而して聞たい主の胸
 添ふて苦勞は世間の習ひ添ぬ先から此苦勞
 袖にとまりし此梅が香は東風の便りか今朝の春
 包むかすみの袖綻びてかほりこぼした峰の花
 月夜鴉と止めては見たが嘘のつけない暁の鐘(53)
 寝顔に見惚て首尾案じつゝ明きる今まで起しかね
 念が届いてアレ嬉しやと思やお前のまた浮気
 永い浮世に短い命今日も一日かへりやせぬ
 なびく心の柳をすてゝ水にうつりし月の影
 埒もない事又言つてのり夫を手にして切れる気か
 樂は望まぬ苦勞は承知苦勞し甲斐のあるように
 無理を云のが私の無理か無理を云せる主が無理
 虫が好たかお前の嘘を実にしてまで嬉しとは
 浮れ騒ぐは千鳥のくせよ鴛鴦は番ひの浪枕(54)
 嘘と知りつゝ若やと思ひ又誑さるゝも恋の情
 意見位で恋路が止りや落る夕日と呼もどす
 意見聞きたび身を持直し花も浮気の枝を折る
 残おしさに跡見送りて月を相手にひとり言
 野辺の千草と仮寝の床に恋のなさけに迷ふ蝶
 奥歯きりきり我慢をしても何時覚たか癩とやら
 訝な調子で心の駒の狂つてつないだ三の糸
 苦勞するの覚悟の前さ意気な男を持ちからは
 愚痴を言ふのもお前の為よ知らずば仏で暮たい(55)
 やがて女夫に鳴海の浴衣思ひ染たも無理はない
 野暮はやつぱり妾に葉粹な主ゆゑ身もやせる
 枕引きよせ又寝の床に主の姿の夢うつゝ
 誠一ツの二人が中も痴話の手管に嘘も云ふ
 喧嘩して背中合も夜風が染て寒くなつたと直
 今日か明日かと待たる花も咲ば苦になる雨と風
 不図した事からツイ乗が来て今は片時忘られぬ
 文を引き裂き丸めて噛で恨みも奥歯の内云ふ
 心に嬉しい首尾したとて笑顔で帰せる朝は無(56)
 是が惚たと言ふのか知ん糸しなつかし気が揉る
 襟につくの操の一つ結る所は主の為め

笑顔で逢ふたる嬉しい首尾も朝は別るゝ忍び泣
 手鍋提てもアノ人ならば欲を離れて恋の欲
 照す心で居るのが憎い硝子障子の窓の月
 洗ひ髪ほど心をといて主に誠をつげの櫛
 雨が取り持つ相合傘の柄漏のしづくで濡る恋
 小夜更て月を待間のアノ郭公逢たい見度と焦泣
 左程お前に実あるならば愛想づかしも程がある(57)
 義理も人情も今日此頃はすてゝ逢たい事ばかり
 来たとの報に飛立つ思ひ隠せど笑顔が承知せぬ
 雪の化粧をした梅よりも実は素顔が頼母しい
 夕べ結んだ此揚巻も今朝は口舌のもつれ髪
 目顔で思を見せ度けれどきまり悪いが先に立つ
 雌鳥が時を作つて雄鳥なくが妾や主故泣明す
 水を手まくら楽しい女夫粹な隅田のみやこ鳥
 見れば見る程思がつのり見ねば見ぬので恋病
 忍び逢ふ夜はきぬたの音もいつか乱れし月の空(58)
 しめる障子に面影のこす寝屋に嬉しき月の梅
 縁も時節も真誠がたより仇や浮気で添れうか
 絵にも書れぬ互の誠一緒にならひでおくものか
 月にせかれて明りを消して月に見らるゝ隠し文
 人知れず思初しがモウ兎や角と浮名が立ては猶止め
 もつれかゝりし此黒髪を解て結ぶも折がある
 元々浮気で斯なりながら浮気するなも能出来た
 せゝる火さへも蛸となりて逢ぬ夜毎にこがす胸
 世間の手前で切れるも然り而して又出会茶屋(59)
 酸も甘いも承知の上でそんな別らぬ無理ばかり
 末の未までもつれて解て胸のやなぎの恋の風(60)
 大正五年四月廿五日印刷
 大正五年四月三十日再版発行
 不許複製
 著者 花の家主
 発行者 大阪市南区北長屋町四十九番屋敷
 岡本増次郎
 印刷者 大阪市西区阿波座中通二丁目四番地
 荒木佐兵衛
 大売捌所 大阪市南区四ツ橋東南詰南へ入

岡本増進堂
電話南四一 式式振替阪八四四九 (奥付)

四十 『意気な端唄と都々逸』

(大正十三年 小玉曉村編 菊池所蔵)
小玉曉村は昭和十七(一九四二)年に没している。

意気な端唄と都々逸 (表紙)

意気な端唄と都々逸 (表紙)

欽英堂発行 (扉)

はしがき

《省略》

都々一! は普遍的勢力に於て、俗曲界の勇将である詩形の短小と、

調節の平易とは、自然的に斯界の隆運を来たしたのである。終始一

貫したる都々一の生命は思慕恋愛の情調である。真摯の氣人に逼り、

率直の情掬すべきは、此の歌詞本来の真価である。

曉村識 (序ウ)

《省略》

いろは

いろははづいたるあの鬼灯の、いつか目につきちぎられる。

ろ、ろくにはなしもきかない内に、夫と悟るも恋の道。

は、早く苦界を目出度かしく、かへすがへすのにないやうに。 (236)

に、逃した藪蚊のあれ憎らしい、打に打れぬあの寝顔。

ほ、惚れちやあれども言出し憎い、何うか先から言ばよい。

へ、平家の一門皆蟹となる、わたしや悋気で鬼となる。

と、遠ざからせて辛抱させて、未にや一つになる覚悟。

ち、痴話も口ぜつも最ういひ尽し、しんの話に夜が明る。

り、りかうなやうでもをんなは女、もしやさうかと欺される。

ぬ、濡れて色増す若葉の紅葉、末にや浮名の龍田川。

る、るりやあさぎに咲く朝顔も、色は変われど根は一つ。

を、をしい人目の閑所を越して、主にあふ夜は嵐山。

わ、悪い心をさらりとやめて、鬼も仏になる習ひ。 (237)

か、かつらをとこに此の身を任せ、胸を明石の浦住居。

た、他所で解せる帯とも知らず、くけて遣たが口惜しい。

た、たく水鶏が待つ吹く風が、更けて妻戸におとづる。

それ、添寝した夜の寝まきのおびは、口舌するのも恋の欲。

つ、尽ぬ名残にただぼんやりと、あとで気の附煙草入。

ね、年の明くのを指折数へ、ほつと一いき眼に涙。

な、泣くもぢれるもふさぐもお前、機嫌直すもまたお前。

ら、楽を振り捨て我心がら、知らぬ他国で苦勞する。

む、むかふ鏡の煙草の煙、一寸中をば通りぐも。 (238)

う、驚の声を聞かねば月日も知ぬ、深山住居も主故に。

の、井戸の蛙と言れるとて、やがて世に出るときがある。

の、残り惜しやとあと見送りて、月を合手に独り言。

お、おつな張りからついで、すこしあんの明さす。

の、暗い言ひ訳晴れたと聞いて、すこしあんの明さす。

く、おつな張りとあついで、すこしあんの明さす。

や、暗い言ひ訳晴れたと聞いて、すこしあんの明さす。

ま、暗い言ひ訳晴れたと聞いて、すこしあんの明さす。

け、暗い言ひ訳晴れたと聞いて、すこしあんの明さす。

ふ、暗い言ひ訳晴れたと聞いて、すこしあんの明さす。

こ、暗い言ひ訳晴れたと聞いて、すこしあんの明さす。

え、暗い言ひ訳晴れたと聞いて、すこしあんの明さす。

て、暗い言ひ訳晴れたと聞いて、すこしあんの明さす。

あ、暗い言ひ訳晴れたと聞いて、すこしあんの明さす。

さ、暗い言ひ訳晴れたと聞いて、すこしあんの明さす。

き、暗い言ひ訳晴れたと聞いて、すこしあんの明さす。

ゆ、暗い言ひ訳晴れたと聞いて、すこしあんの明さす。

め、暗い言ひ訳晴れたと聞いて、すこしあんの明さす。

み、暗い言ひ訳晴れたと聞いて、すこしあんの明さす。

し、暗い言ひ訳晴れたと聞いて、すこしあんの明さす。

ゑ、暗い言ひ訳晴れたと聞いて、すこしあんの明さす。

ひ、暗い言ひ訳晴れたと聞いて、すこしあんの明さす。

も、暗い言ひ訳晴れたと聞いて、すこしあんの明さす。

せ、暗い言ひ訳晴れたと聞いて、すこしあんの明さす。

す、暗い言ひ訳晴れたと聞いて、すこしあんの明さす。

大正十三年一月五日第十版印刷
大正十三年一月十日第十版発行
定價金参拾錢
複製不許

意気な端歌と都々逸

編者 曉村生

発行者 大阪市南区横堀七丁目二十一番地

印刷者 此村庄助

大阪市南区北炭屋町二十番地

八十島米次郎

大阪市南区安堂寺町西横堀南入

発行所 此村欽英堂

振替口座大阪千六番（裏見返し）